

第二章

生業と生産

第二章 生業と生産

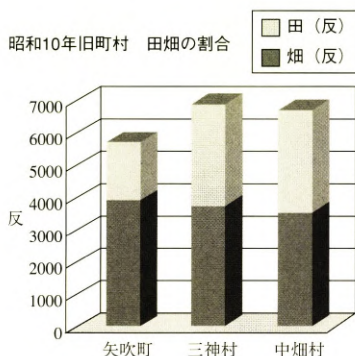
この章では矢吹町に住む人々が、どのような経済活動に従事し依存してきたのかをみてみることにする。伝統的な生産や生業は自然に働きかける営みであり、人と人の意思の通いあいの中に培われてきた活動であった。

生業とは生活のための経済活動つまり仕事を意味する。食うための活動である生業と生産は、コストを削減しながらいかに効率よく収益をあげ、それを安定させるかという課題をつねに抱えている。そのために伝統的な社会であつても停滞していたわけではなく、種々の工夫をこらし革新的な技術をとりこみながら歩んできた。しかし戦後の高度経済成長は、それまでわたしたちが持っていた伝統的な発想を転換したところに生れたものであつたために、長い間依存してきた伝統的な技術や発想は根底からことごとく覆くつがえされる結果となつた。遠い過去から培われてきたその土地の生業や生産活動は、わずか二世代ほどの間に劇的な変容を遂げたのである。これをもとに戻すことはできないし戻す必要もないが、培われてきた営みにはなんらかの意味があつたはずである。これを再評価するためにもこの章では伝統的な生業や生産活動に着目して、そのようすや技術を記録しておくことにする。

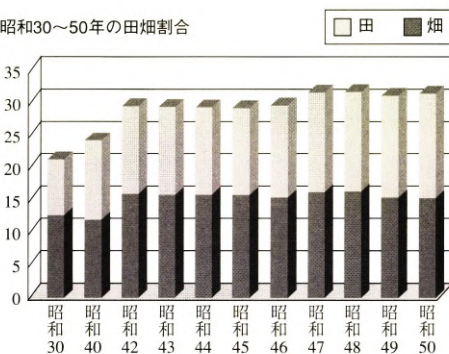
第一節 農 耕

【表1】昭和10年旧町村 田畑地目割合（反）

	矢吹町	三神村	中畑村
畑（反）	3899	3697	3497
田（反）	1799	3140	3193
合計	5698	6837	6690
畑%	68.43%	54.07%	57.27%
田%	31.57%	45.93%	47.73%



昭和30～50年の田畑割合



【表2】昭和30～50年の田畑地目割合（単位平方キロ）

	昭和30	昭和40	昭和42	昭和43	昭和44	昭和45	昭和46	昭和47	昭和48	昭和49	昭和50
畑	12.45	11.97	15.95	15.93	15.9	15.88	15.48	16.25	16.33	15.46	15.36
田	7.67	12.25	13.56	13.56	13.57	13.56	14.17	15.56	15.5	15.74	16.2
合計	20.12	24.22	29.51	29.49	29.47	29.44	29.65	31.81	31.83	31.2	31.56
畑%	61.88%	49.42%	54.04%	54.02%	53.95%	53.94%	52.21%	51.08%	51.30%	49.55%	48.67%
田%	38.12%	50.58%	45.95%	45.98%	46.05%	46.06%	47.79%	48.92%	48.70%	50.45%	51.33%

第一節は稲作と畑作をとりあげる。矢吹町の歴史は矢吹ガ原と称した原野の開発の歴史でもある。矢吹ガ原は近世、近現代をとおして入植者が苦勞を重ねて原野を拓き、農地化し現在にいたっており、その苦闘の跡は『矢吹町史1通史編』にも詳しい。水の便が悪い矢吹ガ原はまず畑として開発された。昭和十年（一九三五）はおそらく近世の雰囲気はまだひきずっていた時代であろうと思うが、この年の旧矢吹町、三神村、中畑村などの田畑の割合をみると（表およびグラフ参照）、

いずれも畑の割合が水田面積を凌駕^{りやうが}しており、当地方が畑作に依存してきた地域であったことがわかる。この傾向は昭和三十年（一九五五）ころまで続く。しかし昭和四十年（一九六五）には田畑^{あきこう}の比率が拮抗^{きつこう}するようになった。これは昭和三十一年（一九五六）の羽鳥ダムの完成によって豊富に水が供給されるようになり、従来の畑地を水田化したためである。

本節では機械化される以前の稲作と畑作についてとりあげることにする。しかし機械化される以前の農耕といっても、当地はかたくなに伝統にこだわった地域ではなく、むしろ積極的に新技術を導入しようとした地域であったことは、農業振興研究村、農業機械化指定部落、畑作改善営農試験地などの指定を受け『目で見る矢吹町史』実験的な試みを受容したことでもわかる。矢吹町が地味の貧弱な水に乏しい土地柄であり、しかも近世からの村落だけではなく、近代以降になって各地から集まった人びとの多い町であることが進取の気質の素地にあるのではないだろうか。

一 稲作とくらし

（一）稲作と環境

耕地のようす

農耕と自然環境との関係は不可分である。ことに水田稲作では水が不可欠であり、水田の分布と水源とは関係が西から東の阿武隈川に注いでいる。もう一つは町の西部には隈戸川が北流している。こうした川の流域に沿うように氾濫原があつて水田はここに多く分布しているが必ずしも古い時代からの開田ではなかった。阿武隈川に接する氾濫原は崖にもなつていて水面に遠く、地元の人たちは水がすぐ下にあるにもかかわらず、かつては水を得ることができなかったことを嘆いていた。こうした広い氾濫原が水田化されたのは阿武隈川の水をポンプアップして利用できるようになってからのことであり、川に接していたとしても必ずしも水田ではなかった。以上の三つの河川に挟まれた内側には典型的な矢吹が原の段丘群が点在する。平坦地

にある矢吹町役場が標高二八五メートルくらいなので、最も高くても五〇メートルほど平均二、三〇メートルの丘陵が点々と広がる。むしろこうした丘陵の山ひだに水源を求めてせまい面積の水田が数多く開かれてきた。丘陵は砂、粘土、泥炭、シルト、礫などからなるといい、水田の土質としてはともかく水源に乏しい浅い山であることから水の確保に難儀したことは明らかである。後述するように、盛んにアマヨバリ（雨乞い）がなされていることはこれを示している。町内には現在でも溜池が多く、江戸時代の地誌には無数といってもよいほどの溜池が書きあげられているのは、乏しい水をこまめに貯水し大切に使いきつていこうとしてきた当地の開田の歴史と田んぼへのこだわりを物語っている。

矢吹が原の多くは畑地として開墾されてきており、水源を大きな河川に求めることができ、大規模な土木技術によって地形を改変することが可能になった昭和三十年代以降になつてはじめて、かつての畑地を水田化できるようになったのである。矢吹町ではヤジツタつまり谷地田が少なくないが、こうした好条件とはいえないところにも水田が開かれているのは、畑地は確保できても水田の米を得ようとする、米に対する執着からであつたろう。しかし丘陵地帯はマイナスの条件だけではなく多様な恩恵をもたらしてくる。矢吹が原の丘陵はコナラをはじめとする雑木山であるために、使いきれないほどの落葉をうみ出す。これを腐葉土として堆肥に利用し、灌木や草を緑肥の採取地としてきたのである。また水の湧き出す谷あいの暖かな場所に伝統的な苗づくりの「水苗代」が近年まで残っていたのも、これが阿武隈高地の自然条件に適した耕作法であつたからなのである。



【写真2】平地に広がる田んぼ



【写真1】谷あいにかかれた田

ジョウダとヌル

圃場はじょうの基盤整備がなされる以前は、同じ「田んぼ」でも条件の良

メダ・ヤジッタ

し悪しは極端であった。水はけのよい乾田はジョウダとかジョウデ

ン、ヤマなどとよばれており作業も容易で収量も多い。それに対し水がじくじくと湧き出す田や水はけが悪いいわゆる湿田をヤジッタとかヤダ、ヤジ、ヤジッポ、ドブッタ、ヌルメダなどよび、収量も少なく作業もしにくかった。ただ、同じ湿田でも人もはまってしまような湿田はヤジッタ、ヤダとよんでいるが、常時水が溜まっているような半湿田のことはヌルメタンボ、ヌルメダと称している。ヤジッタは泥炭層の土質でずぶずぶとどこまでもぐつてしまい、太ももくらいまでもぐることまではなく、牛馬もはいれないため手作業に頼らざるを得なかった。しかし収量も少なく収穫する米の味もよくなかった。一方ヌルメダはかたく粘りのある粘土質の地層が底にあるために、水はけが悪く湿田になっている田で、つねに水と肥料分が供給されているためにむしろおいしい米がとれた。

ヤジッタもヌルメタンボも谷あいにある田に多く、特にヤジッタは天水に頼る天水田であったので溜池をつくって水を確保しておかなければならなかったし、場合によっては溜池の水を使いきってしまうと水不足を招くこともあったという。町内でも三神地区は溜池と湿田が多かったといわれており、それを裏付けるように江戸時代の『白河風土記卷之十三』の三城目村の項にはこの村だけで二三もの池が書きあげられている。矢吹町内でも条件のよい田は本家筋が保有している例が多いが、湿田が類別されているのは興味深い。

農耕儀礼

生業の枠をこえ、稲をつくることが生活の目的とされてきた時代は長かった。わが国の人びとが米を単に作物の一つと考えず、特別な作物としてこだわり続けるのも、こうした歴史とは無縁ではない。また、農耕は自然に左



【写真3】町内各地に点在する溜池の1つ

右されるため収穫を待たなければ結果が出ない不安定な生業でもある。こうしたこともあって、稲作の過程には神霊の加護を得るためにさまざまな祭りが組みこまれており、家々の年中行事は農耕の儀礼を根幹にして成り立っているといってもよい。矢吹町でもさまざまな農耕儀礼がみられるのである。一月には鋤入れ、団子さし、ハヨモジリといった予祝の儀礼があり、種まき後の水口の祭り、田植え後のサナブリ、稲に虫がつかないようにまじなう稲虫送り、降雨を乞うアマヨバリ、台風を除ける八朔祭り、収穫を祈念する鎮守の秋祭り、収穫後の刈あげ餅、作業が終ったときの扱きあげばた餅などである。これらの内容については第六章の一年の生活を参照されたい。水の便が悪かったこの地域では、日照りは田畑にとって大きな打撃になる。そのためにかつては雨乞いをよくおこなっていたといい、雨乞いの多さははしくも矢吹町の立地条件を表現している。

雨 乞 い

雨乞いは、長い間日照りが続き田にかける水が不足するときにおこなう、呪術的な儀礼であるが、町内には水利の条件が悪い地区が多くあり、水不足は田植えどきと苗の成長期には深刻な被害をもたらすために戦前まではアマ(アメ)ヨバリ(雨呼ばり)が盛んであった。町内の雨乞いの様子を簡単に紹介しておこう。

区長が召集して一戸一人、青年団員全員が馬頭観音堂に集合し、セイネンが雨呼び太鼓をたたいて降雨を祈ってから持参の重箱で飲み食ひした(明新、藤井友治)、集落の人が国神(薬師堂)に集まり太鼓をたたきながら「アメツツァーユーワイヨー、ザツツァゴザツツァゴフツテコー」と叫んだ(原宿、関根ミイ)、西原の明武神社でセイネンが太鼓をたたいて騒いだ。空気を振動させると雨が降ると思われる(三城目、太田昌弘)、三城目の青年団全員が集まり、御霊神社で神主に祈祷してもらい、西原の明武神社で酒を飲みながら大声をはりあ



【写真4】 中畑地区の共同防除 こうした薬剤を使う以前にもさまざまな虫害の防除があり、その1つに呪術的な防除もあった

げて雨をよぶ（陣ヶ岡、加藤正直）、明武神社で雨乞い踊りをした（三城目、浅川政明）、集落の人が集まって明武神社の池の水をかき回す（三城目、関根昭三）、集落から一戸一人が重箱持参で雷神社に集まり、集落からは酒を差し入れ、乾（北西）の方向から雨乞いの太鼓を鳴らし神主も祭文をあげて祈った（堰ノ上、根本義正）、集落の人が蓑笠をつけて田の神様に集まり、笛太鼓で雨乞いした（一区、藤田スイ）、近津神社に皆が蓑笠を着て集まりお神酒をあげ雨乞い太鼓を打つ（松倉、富永敏雄）、日吉神社で青年団が太鼓を打って雨乞いした（四区、星信之助）、鎮守様で桶に水をはり、高い所をめぐって振りかけて雨をよぶ（曙町、中村孝敏）、青年団が雨乞い太鼓を打つ、あるいは青年団が阿武隈川上流の大隈滝にいき、滝つばに石を投げこんで滝つばに棲む竜神を怒らせる（松倉、井戸沼ウウコ）、大正十一、二年ごろ大隈滝の滝つばに釘や針を投げいれたと聞いた（根宿、後藤助一郎）、観音堂にお籠りし、明新上地区にある阿武隈川の大石で太鼓をたたいた（明新、円谷正勝）、阿武隈川の雨乞壇という所で大声で「雨よー、雨やーい」とよぶ（神田、藤井直喜）、蓑笠姿で矢吹神社に参拝してから滝に石を投げて水しぶきをたてると雨が降る（弥栄、佐藤一郎）、地区の人が蓑笠を着て矢吹神社に雨乞い祈願をし、「雨たんは弱いで、ざっさこ、ざっさこ降ってこい」と唱えながら町中練り歩く（小松、大野弘美）というものであった。

矢吹町内の雨乞いは太鼓をたたき、滝つばにいたずらするという形態が目立つが、後者は水神を怒らせて降雨を得ようとするもので、前者は雷を象徴する太鼓をたたいて降雨を促す典型的な類感呪術である。

（二）稲作の過程と稲づくりの準備

稲作のプロセス

稲作は冬の予祝儀礼なども含めるとまるまる一年間にわたる作業といってもよい。口絵に掲載されている「農業の絵図」は伝統的な稲作のプロセスが一年にわたるものであることをよく示している。「農業の絵図その一」には種もみの準備から種まき、本田の田うない、肥運び、肥ふり、代掻き、田植えまで、「農業の絵図その二」は草取り、稲刈り、千歯扱きによる脱穀、粃摺り、唐箕、万石（マンガク）による選別、米つき、正月の祝いまでと一年間の稲づくりのあ

りさまが彩色で描かれている。掛軸の右図には二四名、左図には三二名の人物が登場しており、髪型からすると近代にはいつてからの様子と推察される。また描かれている民具からもこのあたりの稲作のプロセスと考えてよさそうである。たとえば下肥をいれる肥樽やキツカケ三本鍬などがあり、また種まきをする水苗代には、苗のしるしにする二本の竹のようなものが挿してある。この絵図は稲作のプロセスだけではなく、民具の使い方や作業の動作をよく理解できるすぐれた史料といえよう。

ところで、機械化された農作業では極端に言えば、足を汚さずに一年の作業を終えることも可能である。アシダカとはだし

業のときにはく履物で、鼻緒に結び目があつて角のようにみえるのでベコゾウリとも称した。アシダカとは足半、つまり踵にまでかからない台の短い草履で、スパイクのようなものと考えてよい。霜が降る寒い時期であっても山仕事であつても素足にこれをはいて作業した。歩きやすくスッパネ（シッパネ）があがらないという。しかし田んぼの中では履物をはかすにはだしになって作業をした。泥の中では草履は脱げて意味がないし、田の中は石ころひとつないように気配りしていたからである。アシダカや俵は冬仕事の藁細工で一年分を自作する。家によつても違うがアシダカは二〇〇足くらい、俵は一〇〇俵分ほどを編んだという。チカタビ（地下足袋）が出まわり、親指がある地下足袋、ゴム長靴が登場するようになって徐々に自家製履物は必要性を失い、田の中でも履物をはくようになる。しかしかいた家では近年まで田の中にはいる場合は履物を脱いではだしで作業をしていたという。



【写真5】 アシダカ ベコゾウリともいい、農作業のときにはもっぱらこれを履いた

肥 料

秋うない前には近くの田であればタガラ籠で堆肥を背負って田に運ぶ。一反歩につきタガラ籠で一〇くらいの割りあい堆肥をうないこんだ。堆肥は背負ったままであけるので斜め方向にかがまないと堆肥を頭に被ってしまう。一月には下肥を汲んで肥柄杓こまひしやくを使って水苗代にまいておく。これを寒タラといった。春にもダラ（下肥）をかけ堆肥を散らしてうないこむ。堆肥を遠くに運搬する場合は馬の両脇にさげたビクにいれて運んだ。堆肥は落葉後に落ち葉を集めてつくる（畑作の「木の葉さらい」参照）。また、ハツパグサ（根宿）（根宿）といっていわる「刈り敷き」である緑肥も田に踏みこんだもので、魚粕、ダイズ粕、蚕さなぎのつぶしたのも肥料として使用していた。大正時代になると徐々に化学肥料が出現し過燐酸がまず使われ、その後単肥の硫酸、加里、過燐酸がそろい各自配合して使うようになっていた。

レンゲ草刈り

レンゲ草は肥料にするために稲が色づくころに稲の間に種をまいておく。レンゲに実がはいるころをみはからつてレンゲ草刈りをするが、レンゲ草刈りとは伸びたレンゲを鎌で刈りとることで、刈りとったレンゲを田に鋤きこむ。レンゲを栽培していたのは昭和三十五、六年ごろまでであった。

田うない

かつては田植えにさきがけておこなう春五月二十日ごろの田んぼうないと稲刈り後の秋うないをした。人力でうないには三本鋤さんぼくわを使うが、春うないと秋うないとは使用する農具が違う。秋うないには「キツカケ三本鋤」を用いる。キツカケは三本鋤ではあるが刃先が平たく刃の幅も広い。キツカケで稲株を起こし、起こした稲株をひっくり返して一方の稲株の上に被せる作業である。稲株を一直列に掘り起こすことになり、起こした所は溝になって被せた列は山になる。田の土を起こして寒風にさらしておく。春の田うないでは「マエツピキ三本鋤」を使って田を起こす。マエツピキは刃先が尖っていて刃の幅はせまい。春の田んぼは土がかたく、かたい土質を掘り起こすには尖っている方がよい。春先の田うないは重労働で



【写真6】堆肥（提供 小磯忠三）

腰が痛くなるので村のワカモノたちに任せることも少なくはなく、ワカモノたちは喜んで手間取りをひき受けて小遣いませいだという。

人力でうなう場合の道具にも変遷があつて、三本鋤から三本マンノへ、三本マンノから四本マンノを使うようになっていく。三本鋤は刃と柄の角度が鋭いため、かがんで作業を続けなければならないが、マンノは柄と刃の角度があいているので「立ちマンノ」ともよばれ、立ったまま楽に作業ができた。

ヤジッタとかヌルメダとよぶ湿田の田うないは乾田よりもさらに苦勞の多い作業で、農具も乾田とは違うものを使つたというが、泥質耕地では刃先の広いキツカケ三本鋤が使いやすいと、そのためかキツカケのことをヤタグワ（谷田鋤）とも称している。従つてヤジッタの作業にはキツカケ三本鋤、三本マンノ、四本マンノを用いたものであつた。中畑地区などはヤジッタが多く、圃場整備以前は乾田は畜力を利用してきても湿田だけは人力に頼らざるを得なかつた。

昭和の初期に手マンガによる人力の作業から牛馬にひかせる馬耕鋤が導入され畜力を利用して田うないをするようになる。馬耕では一条ずつうなつていくが、小さな田やヤジッタは馬耕をかけることができないので手作業でほつくり返し、手マンガを押してならすしかなかった。馬耕をかけた後、ハロー（耙耨）を使って土の塊を砕くが、ハローは三角形の台木に長い刃を打ちつけた農具で牛馬にひかせて使う。



【写真8】マンノ（万能）
四本（左）と三本（右）がある
（提供 後藤助一郎）



【写真7】三本鋤 キツカケ（左）とマエビキ（右）があり
使い分ける（提供 後藤助一郎）

田に水をひく 明新では六月十日ごろに田植えをしたので、その前に田に水をひく。明新の溜池はマツツバ（松葉）池と大池

・池抜き である。大池のすぐ下に隣接して中野目池があるが中野目池は明新のものではなく中野目集落の池である。明新の池の水は中野目の田んぼまでいくことになっているが、中野目では堰の水を使うようになったため、池からの水は使わないようである。明新の池抜きすなわち、溜池の水を抜くのは六月一日で、あらかじめ区長が許可して集落内に触れを回す。区長が許可しないと池の水を使うことができなかった。日照りで田が乾ききつているときには雨が降って五、六日過ぎてから池抜きをしなければならぬ。降雨を待たないと、せっかくかけた池の水が田に吸いこまれてしまい末端までいきわたらないからである。池抜きすると「うちがおわったから、かけてくださいよ」と次の田を持つている家に口伝えるならわしがあつて、これをオクリといっている。夜にかかる場合、「夜水」は止めて夜明けになってから抜くようにしている。また自分の田が終るとその人の責任で水を止める決まりになっている。こうしたルールは田植え前の時期のことで、田植えがすむと普段は田に水がほしい人は自由に抜くことができる。

田植えに際して田の水が足りないときにはヤクミズ（役水）といって、区長と役員が立ち会いで順番に田に水をかけていき、それでも足りなくなるときには区長の権限で「水どめ」にした。明新の二つの池は天水を溜めるだけであつたため、天候頼みで水不足に悩まされることも多かった。しかし、昭和三十年（一九五五）に「明新」の開拓のための灌漑用水として阿武隈川から川の水をポンプアップするようになり、このときに池の上の方に噴き出し口を設置し、田植え前から刈りとり前までは常時川の水を溜めることができるようになったので、水はいつも余分にある。阿武隈川のポンプを稼働させるのは六月一日で、停止させるのは九月五日である。

クロ塗り うなつた田に水をひきいれるのは代掻きしろかの二、三日前である。まずクロ塗りをするが水が豊富な田んぼのクロ塗り・代掻き りは代掻きの後にする。溜池を利用するような田は水がもつたいないので、まず少し水をいれてクロ塗りをして水が洩れないようにしてから代掻きにはいる。クロ塗りは畔のそばにはいり、足で泥をこたこたにしてキツカケ三本鍬でクロに

泥をおいていき、それが乾かないうちに鍬の背できれいに均し、水が洩れないようにすると同時に見栄えをよくする。クロ塗里には畑で使う鍬を使う。しかし刃に柄をとりつけてあるカナグワ（鉄鍬）を使った方がよいという人もいれば、風呂（台）のついた鍬を使用するというように決まっていはいない。代掻きは牛馬にマンガ（馬鍬）をひかせておこなう作業で、まずアラシロカキ（アラシロともいう粗代掻きのこと）といつてマンガをひかせておこない、その後二、三日してナカシロカキ（ナカシロ、中代掻き）をする。中代掻きは粗代掻きと同じである。その後間をおかずウエシロカキ（ウエシロ、植代掻き）をする。ウエシロカキはマンガの前にナラシ（均し）板とよぶ板や棒をつけてひき植え代を平らに均す。馬には竹のハナザオをつけ制御するが、これは学校がサツキの休みにはいるので子どもの役割とされておりハナドリ（鼻取り）とよぶ。馬鍬を押す人を馬鍬押しといい、「鼻取りと馬鍬押しは仲わりい（悪い）」といわれたものである。これは鼻取りと馬鍬押しの呼吸をあわせるのが難しいことを表わしている。一枚の田は一遍に掻くのではなく大きな田であれば四等分くらいにして時計回りに渦巻き状に歩く。田んぼは平滑で広いので子どもにとっては目印がなく、同じ所を周ったりしてしかられたものである。湿田の場合は手マンガでの手作業に頼る以外にない。マンガをひく綱をハヨナワとよび田内などでも一月十九日にユイ仲間の人たちが集まってもじった。代掻きは馬も人も泥まみれになるつらい作業であった。

種まき桜

自然と共存する生業の農耕では、わたしたちが普段用いる一律な「暦」はあくまでも目安でしかない。栽培にふさわしい条件は土地により、また年によって水温や気温、日照などに差異があるため、長年の経験から「土地ごとの暦」が生れてきた。



【写真10】代掻き（昭和15年頃 提供 後藤助一郎）



【写真9】マンガ（馬鍬）（提供 後藤芳一）

その一つが草木の状態などを目安にする「自然暦」で、町内の各集落にある種まき桜もその一つである。これは桜の開花を農作業の基準にするもので、矢吹では「種まき桜」とか「種あげ桜」、「苗代桜」などと称している。厳密な基準にしているわけではないが、今でも親しまれている桜が多い。大和久には「種まき桜」とよぶ桜の木があつて、その桜の花が満開になったころを目安に種まきをした。咲くのは例年四月二十三、四日あたりになる。三神の「種あげ桜」は観音様のそばにある桜で、ひやした種をあげて種まきをする目安にできた。ここでは「苗代桜」とか「種まき桜」などともいつている。根宿には三〇〇年も経つ桜の古木があり、これが根宿の「種まき桜」である。

タナ池に「種をひやす」とか「種もみひやし」という作業が稲作の開始になる。「ひ種をひやす やす」というのは浸種すなわち種粉を池の水に浸すことで、春彼岸を目安にして、以前はひと月ほど水に浸けておいた。種をひやす池をタナ池といつて集落内には何か所あり、かならずしも共有の池ではないが皆が使うことができた。タナ池は「種池」を意味する。麻の刈に種粉を二から三斗（三六から五四リットル）分くらいいれ、それを二か所くらいしはり、深みに流されないように土手に杭を打って杭に吠をしはりつけておく。

消毒と種粉 ひやしておいた種もみは四月中旬から下旬にかけてひきあげ、水をはった桶にいれて消毒する。そして「一晚温の保温 度かける」といって、袋にいれた種もみを家族がはいった後の風呂の湯の中に一晚浸け、さらに藁でつくった寢床に二晩ほどねかせておくと芽が出る。こうした作業も今は過去のものとなった。

苗代の代掻き 種をまく苗代の準備もすすめておかなければならない。中畑では種まきの四日前までに苗代の代掻きを終わらせておく、四月下旬には種まきをしていたという。苗代の代掻きは、手ジロといつて後にさがりながら手マンガ



【写真11】古山王の種蒔き桜

を使つて代を掻く。苗代の真ん中には篠竹しのたけを三本ほど立ててまぐときの目安にする（根宿）というように、目安の篠竹を立てるならわしは町内にもわずかながら聞かれる。隣村の大信村でも柳の枝をさしたり（『大信村史三民俗編』）、白河市内にはウツギの枝をさす（『白河市史九民俗』）例などもあるが、このしるしは単なる目印ではなく本来は田の神の依り代よりしろではなかったかといふ解釈もある（柳田国男「苗忌竹の話」『定本柳田国男集』一二三）。

水 苗 代

苗代にも変遷がある。現在は苗代そのものを使わなくなってしまったが、昭和四十年代以前は「水苗代」とよばれる育苗専用の苗代を使った。家にもよるが水苗代は多くの場合一枚あたり三から四畝歩いていどの広さであった。いわゆる「通し苗代」は府県によっては条例で禁止する所もあったが、少なくとも阿武隈高地周辺では昭和三十年代まで使われてきた。原則として、通し苗代は年間を通じて苗を育てる苗代としてしか使わない。

使わない時期には水をひきいれておくが放置するわけではなく、「夏うない」といった（根宿）一夏七回うなうものだといわれ（三神）頻繁に手入れをしていた。冬も正月前にはカンピ（寒肥）、カンゴエをいれるといつて、ダラをいれた振り桶を天秤で担いで田にいき何度も苗代田にまいて管理した。苗代田のクロから一尺ほど離してレンコンを植えておき寒い時期に収穫した家もあったという（大和久）。大和久では清水の湧く所に三畝歩ほどの広さの水苗代の苗代田があり、「種まき桜」もそばにあったというが、どの地区でも水が途切れず、日あたりがよく風あたりの少ない同じような条件の場所に苗代田を設けていた。

苗代の変遷

水苗代から短冊苗代、保温折衷苗代やオカ苗代にかわった。通し苗代である水苗代からほかの方式にかわったのは昭和二十年代から三十年代にかけてのことであった。大和久の保温折衷苗代は〇さん（昭和二年生れ）がセイ



【写真12】かつて水苗代のあった田（大和久）
ヌルメ田んぼで地の利のよいところにもうけられていた

ネンのころに見本に導入した。水苗代の水を切り、一鍬ずつ苗代の泥をあげて高くして短冊型に床をつくる。床に種をまきさらに焼き糠をまいて、その上に畑の土をかけてから油紙で覆った。油紙の端はめくれないように泥で固定する。水苗代は種が泥にひとりでに沈むが、この苗代は泥がないので焼き糠などをまかなければならなかった。しかし水苗代と違い保温するので発育が違い、その成長ぶりに驚いたという。オカ苗代は畑につくる苗代で、農業改良普及所で勧めた方式であった。床をつくって種をまき、焼き糠や土をかけその上にトンネル状にビニールをかける。オカ苗代の苗はことに根のはりがよかった。

種まきと 風があると種が均一に飛ばないので、種まきは朝飯前の風がない時間におこ水口の祭り なった。ひもをつけた箆を肩から斜めにさげ、箆にいった種籾を田のクロを回りながらまく。水苗代は短冊苗代と違い、全面が苗代なのでクロを回りながら均一になるよう加減しながらまく。そのためあつてクロから最も遠い苗代の中央部には目印の篠竹を立てておいた。またもみはもみ自体の重さで水をはった泥の中に沈んでいくので、保温折衷苗代などとは違い水苗代の時代にはその上にほかににもまかなかったが、水加減が重要であった。また種まきした後水口で祭りをすることはなかったという地区が多かったが、田内では種まきを終らせ、五月四日に紙を三角に折り、そこに焼き米をいれて二ワトコの枝に挟み、それを水口に立てて水口の祭りをしたという。

一軒の家で保有する苗代の面積は持田によって異なるが、三神の一町二反の水田を持つ家では苗代が五、六枚で合計一反五畝ほど、一町弱の水田のある家の場合には六、七畝歩の苗代を持っており、苗代には一枚ごとに種類の異なる品種の種をまいたものであった。



【写真13】保温折衷苗代

(三) 田植え前後と除草

ソラデ除け

ソラデは手首が痛む病気で、田植えなどでしばしば発症した。本村には根津権現という神社があり、そこに奉納されている麻を借りて、借りた麻ひもを手首に結わえつけておくとソラデを除けることができるといわれていた。田植え前にはソラデ除けに多くの人がこの神社を参拝した。また田植え後は借りた麻を倍にし、白木綿の手甲をつくってお返しするならわしがありお礼参りの人も多かった。

田 植 え の 最盛期と禁忌 大和久の場合田植えの最盛期は六月十五日ごろであった。しかしムギを耕作していた二毛作の「麦タンボ」はそれよりも五日から一週間ほど遅れ、六月二十日から二十三日ごろになる。家の都合によって田植えをする日は異なるが、一般に卯の日には田植えをしてはいけないといわれている。しかしこれを禁忌としない例もある。たとえば大和久のY家では卯の日におこなっていた。当主が卯年生れであれば卯の日に田植えをしても構わないといわれるからである。卯の日

は他家では田植えを休むので卯の日に田植えをしても気にしない家ではテマドリが得やすかった。

田植えの仕事量

苗をとって植え終るまで一人一日三畝歩植えることができればイッチョウマエ（一人前）だといわれている。大和久の家（一・七町）では一八人から二〇人の人たちにきてもらって植えた。手植えでは技術の高い人でも一日五畝歩植えるのが限度であった。三神のI家は一日に八人から九人で三反を終らせている。一〇〇把苗をとって一〇〇把植えるのがイッチョウマエで、三人で一反歩を植えるのが一人前の仕事量とされていた。G家の田植えは一町七反を終らせるのに二日で六〇人、I家は田を貸している家が二軒あり、その家の田も含めて十二、三人で一週間ほどかかったという。



【写真14】ソラデ除けの麻（本村・根津権現） 白い布は手甲で、お返しに麻と共に奉納する

ユイとテマドリ

手植えの田植えは集約的な作業なので家族だけで済ますことはできない。従って他人に人手を依頼する。人手を確保する方法は二つあり、ユイとテマドリであった。ユイは「結い」の意であるが、訛ってユエ、ユウイと表現するひとも多い。ほかにユイ仕事といったりユイ貸しという場合もある。「結い」は相互に労力を貸しあうことで、借りた労働力はそれに見合った労力で返済しなければならないという不文律がある。矢吹町内でも、かつてはユイが盛んにおこなわれており、稲作では田植えのほかに、稲抜き、スルスひき、ほかに畑仕事などもユイでおこなわれていた。本分家や姻戚、隣近所の家、友人同士でユイを結ぶが、同じヤシキ内というように隣接する小地域集団の家々で協同する例が多い。

ユイをしても人手が足りない場合にはテマドリ（手間取り）を頼む。手間取りは雇用すること、サツキ（田植え）前に相場（手間賃）が決められていてその賃金で契約した。手間取りは早く田植えが終った家の人や、持ち田の少ない人に頼んだが、親戚に頼むことも多い。

苗取り

苗取りは水加減を確認し、早い家では嫁は朝三時くらいに苗代に出てはじめた（三神）というが、遅くとも田植えをおこなう家の人は東の空が明るくなり始める朝四時ごろから作業にはいるのが普通であった。田植えの時期が次第に早まるにつれて、朝早くからでは水が冷たくてつらいので、前日の夕方に明日の分の苗取りをするような家も出てきた。

苗代にはいり、両手でそれぞれ苗をつかみ、つかみきれなくなると苗を抜き、両手に握った苗の根をあわせて苗をそろえ、根の泥をすすいで藁で束ねる。この動作をリズムよくしないと遅れるし、苗の根元がそろっていないと植えにくい。苗をまとめる藁はすぐって水に浸しておいたものを腰につけ、使うときは一、二本抜きとって、ミゴの方で二巻ほどまわして挟む。女性の方が器用なので苗取りは女性が多かった。短冊苗代からの苗取りは



【写真15】苗取り（提供 星信之助）

並んでおこなうため、上手へたが一目でわかり、遅れると「げいぶん悪い」（みつともない）思いをする。

束ねた苗が一〇把ほどになると後にいる人が集めてクロの上にあげて集める。一人八〇把から一〇〇把ほどないとヒトハカに間にあわないので、人手の少ない家では時間を早めて苗取りをはじめることになる。少なくとも苗は半日植える分は抜いておかなければならぬといわれた。昭和二十二、三年ころは苗取りは一日三回くらいおこなった。

ケロリと苗運び

抜いて束ねた苗束は一〇把から二〇把くらい集めて苗束を数え、植える田に運び、運んだ苗束を田の中にブツ（放り投げる）ことになる。こうした役の人をケロリとか苗配りと言んだ。ケロリは水口の具合をみたりもしなければならず、目配りのきく人があつた。

苗束は小さい田であればタンガラとかタガラともいう籠で運んでもよいが、大きな田になるとタンガラでは間にあわないので、平たい苗籠に苗束を重ねてあげ、苗籠を前後にして天秤棒で担いで運んだり、リヤカーを使って搬送する。運んだものは植えやすいように配分しながら苗をブツ（投げる）。

田植えの方式

苗の植え方も従来さまざまな方式をとりいられた。昭和三十年代には「ガニ植え」といって横に進んで植えていた。これは田の真ん中に印のついた縄をはり、その縄に沿って嫁の立場のような人が一人横に植えていく。次の人は縄に沿って植えた人の後について追うようにしながら、次々に植え進む。一斉に進まないと次の人が植えることができないので遅いと恥をかく。横に植えて進む様子が蟹



【写真17】 タガラ籠（提供 後藤助一郎）



【写真16】 苗運び（右手の2人の男性）
苗束を配っている（提供 星信之助）

の横ばいに似ているためガニ植えといった。なお、一人分の植える範囲を一ハカという。

「タマ植え」はその次に導入された植え方で、はじめに結び目の玉をつけたタマ縄を田のクロ沿いにはり、何人かが一齐に印の所を基準に植えながら後ずさりしていく。全員が一ハカ植え終ると、田の外にいる人がタマ縄を頭越しに移動させながらこれを繰り返す。タマ縄を移動させるときに頭をさげないと頭に縄がひっかかる。ハカが進まないときはほかの人が手伝ってやった。「ガチ植え」とか「ガチ引き」ともいい、前に植え進む植え方で「定規植え」とか「並木植え」などともいわれる。あらかじめ田の水を切り、そこに定規で碁盤の目状に筋をひき、ひいた筋の交点に植え進む方式であった。

ところでヌルメとかヤジツタの場合はなるべく田の中にはいらないようにして植えた。大きな田んぼでは苗がそろうように植えないとみっともなかったが、こうした湿田では苗の並びなどは気にせずにクロに沿って植えたりしたという人も多い。またぬかるみの深い場所には皮を剥いだ松丸太を田に沈め、泥に沈んだ丸太の上につて植える場合などもあった。三城目のAさん宅にもヤジツタがあり、深い所には丸太を沈めて田植えをしたが、あるとき鉄砲ぶちをしている人にかんじきを借りて植えたところ大変具合がよかったので、その後かんじきを使うようになったというが、これは専用のものはなかったし普及したわけでもない。

初田植え

その年はじめての田植えをする初田植えの日には赤飯を炊き、身欠ニシンみけにしんと昆布、ニンジンなどをいれた煮しめをつくり、まず仏壇と神棚に供えるものであった。

田植えの食事

朝は午前六時から七時ごろのあいだに、その家の主婦や嫁が用意したおふかしのお握りを食べる。午前九時ごろにはコビルにする。コビルをコジハンあるいはチャノコという人もいる。赤飯か餅、身欠ニシンと凍み豆腐



【写真18】手植えの田植え（提供 星信之助）

や凍みダイコン、昆布などの煮しめなどであった。ユイやテマドリの人もたくさんいるので、嫁はワゲ（わが家）の田植えのときには飯を炊いたり田植えの準備をしたりで前の晩は寝てなどいられなかった。コビルは田のクロや土手で食べた（三神）というように、田植えのコジハンは田のクロで食べるものであった。昼飯も同じだが赤飯や煮しめなど五品くらいつけたという家もある。午後二時から三時ごろもコジハンをとる。午後のコジハンは次第に折詰めなどにかわっていった。コジハンには酒をつけるもので、手伝いにきた人は飲んでも構わなかったが、テマドリの人は遠慮して作業が終わってから酒をちそうご馳走してもらったようである。

一日の終り

夕方は暗くなるまで田植えをしたというのが、おおよそ午後六時ころには一日の田植えを切りあげるものであった。夕方近くになると「三枚の次はおしまい（四枚と終いをかける）だ」とか、「草履腰にさげろ、暗くなるとみえなくなるから」、「夕方だから早くしまいにしろ」などと親類のユイやテマドリの人たちは冗談をいいあった。

農作業の機械化

田植えは多人数で短期間に完了させなければならぬ大変な手作業であったが、田植えの機械化はだれも予想していなかった。農作業の機械化は戦後急速に進んでいる。『矢吹町史一通史編』には農業センサスを基にした「主な農業機械の推移（個人有）」の統計表がのっており、発動機と電動機は早い時期に導入されていて、すでに昭和二十五年（一九五〇）には矢吹町全体で発動機が五八一台、電動機が五一三台あった。昭和三十三年（一九五七）には動力脱穀機が五一三台、動力籾摺機が六四台、耕耘機が一〇台という数字が出ている。耕耘機は急速に普及するが、一方でトラクターが出現して低馬力のトラクターから、



【写真19】田植え機の実演



【写真20】昭和37年の耕耘機（提供 藤田忠一）

高出力のトラクターへ普及していく様子も読みとることができる。昭和四十年（一九六五）の統計には刈取機に関する数字は出てこないが、昭和四十五年（一九七〇）には刈取機が一〇二台、コンバインも四八台導入されており、両者は昭和四十年代になって導入されたと推測できる。昭和四十五年（一九七〇）の統計に田植え機はわずか二台しか統計にあらわれていないことを考えると、矢吹町における田植え機の導入は一九七〇年代といえそうである。ところが聞き書きでは昭和三十年代後半に田植え機械を導入したと記憶している人が多いことは興味深い。

三神のTさんは、はじめクボタの二条植えの田植え機械を共同で購入した。二条植えの田植え機でも、一台で一日二反歩は植えることができたので田植え時間の大幅な短縮に驚いた。しかし苗箱は木箱を自分でつくらなければならなかったという。当初はユイ仲間などで共同購入することも多かったが、しだいに個人で買うようになっていく。別な人は「百姓仕事は楽になったが、仲間と笑い話をいいあうこともなくなった」というように、ユイのような共同作業は田植え機の普及に比例して消滅していく。

サナブリ・カミゴト 集落内で最も遅い田植えが完了するのをみはからって集落全体で一斉に休み日にするように区長が指示する。サナブリにはユイ仲間やテマドリの人たちを招待して餅をご馳走するものであった。サナブリの骨休めは三日間ほどとった。また田植えを機

にカミゴトとよぶ定期的な農休日がはじまる地区が多い（第六章一年の生活参照）。

田の草取り

草取りは穂が出る時期におこなうと穂をいためるので、^{しゅうすい}出穂の前にすませる。以前は一番草、二番草と決まってはおらず、草の具合をみておこなったという。

苗が根付き、ひっくり返らなくなると田の草取りをおこなってもよい。最初の草取りは田に水をかけおこない、田車で二度押しして土をかきまぜ草を浮かすようにする。二回目の田の草取りは水を抜いてから草をむしり、それを泥の中に埋めていく。しかし「畑にジシバリ、田にビルモ」というように、ビルモとよばれる草は捨てないとすぐに根付くので除いた草は腰にさ



【写真21】田車（提供 大野弘美）

げた腰籠にいれる。穂が出てからはヒエヌキをするが、ヒエは稲とよく似ており穂が出ないうちは区別がしにくく厄介であつた。昭和三十年代になつてから次第に除草剤が導入されるようになる、初期の除草剤は一五リットルいりのタンクを背負つて散布するものであつた。

稲の成長期には虫害や病氣にかかることもまれではないため、旧暦六月ごろには各集落で「虫送り」をして稲の害を防ぐとした（第六章一年の生活参照）。

水の管理

田の水管理は重要で稲の出来不出来を左右する。そのため毎日何度も自家の田を見廻り、水の状態を確認し水のかりくち（水口）と尻水口の手入れをする。圃場が整備されて水不足が解消される以前は、水が不足しがちな地区では絶えず水に氣を配り、不足する場合には夜水引きと称し夜間も水をひきいれる。また水路の土手や畦の草刈りを頻繁におこなつて、水路や田の中に日差しが差しこむように心がけた。少しでも田の水を温める氣遣いであつた。

出穂のころになると田の水をいったん落とす。これを田の水切りといい数日間田を干す。

（四）稲刈りと脱穀調整

稲 刈 り

稲刈りは十月にはいるとはじめる。ムギの二毛作をしていたころには「麦まき土用」といつて、ムギの種まきはムギまきにあわせて稲刈りの作業を進めたのである。ただし中手などの稲は遅くまでおき、霜が降つたり薄氷がはつたりしてからの時期に刈りつていた。

稲はイネカリガマ（稲刈り鎌）で刈るが、稲刈り鎌は柄が短く、細身の刃の鎌ではあつたが鋸齒^{のこぎりば}ではなかつた。一度に二株刈り、それを一旦下におきもう一度二株刈つてから地面においた束と一緒にする、つまり二掴みで一把握に、これを壘四本くらいでまろく。これを小束^{こなば}などという。根宿あたりでは地干しはしないで刈つた分だけハセにかけて乾燥させるといふ。

ヤジツタ、ヌルメ田んぼでは稲刈りも苦勞した。水を干すことができないので刈った稲を地面におくと泥で汚れてしまうのでさまざまな工夫をしている。よくあるのは雑木や松や杉の枝を切つてきて、それを何本かまとめてしばり一メートルほどのひき縄をつけたものを田におくものである。刈った稲をその上にあげておき小束一〇把ほどたまったところで、抱えてクロに運ぶ。クロにはまるったり出したりを専門にする人がついていて運び出した。ほかにも養蚕で使うワラダ籠に刈った稲をのせるなどして汚さない工夫をした例も多い。木製の舟を使った家もあるが名称はわからない。これは横二尺縦三尺くらいの四角の箱状のもので、下部は板壁のようにシコロ葺きになつて湾曲しており、正面には鉄の輪が打ちつけてあつて曳き綱を結んである。刈った稲をその上にのせて綱をひき泥の上をすべらせてクロで出す。

稲刈りも次第に機械化していき、機械化の当初は手動の稲刈り器が出現し、その後稲刈り専用のバインダーが導入され、さらに自走式の脱穀機とセットで使われるようになり、すぐにコンバインが出てきて稲刈りと同時に脱穀もおこなうようになって、みる間に省力化されてしまう。最近の稲刈りは稲株に触れることなく籾を手にすることができるようになった。

種籾とり

来春用の籾種は病気のないでき具合のよい田を選び、丁寧で手刈りとして別にハセにかけて乾燥させる。種子をとる籾は早めに刈りとった方がよい。乾燥した籾の中でも実入りのよいものを選び稲扱きするが、種用の籾はあえて足踏み脱穀機を使い脱穀機を弱めて、ミゴが実についている程度に丁寧に脱穀する。通常の籾を扱くように勢いよく脱穀すると籾がむけて傷がつくからである。種籾は吠にいて保管した。現在は一反歩につき四クラムの割りあい確保しておく。



【写真22】手刈りの稲刈り

(昭和12・13年頃 提供 藤田忠一)



【写真23】コンバインによる稲刈り (昭和48年)

ハセがけ

稲を乾燥させることをハセがけとかハザがけ、いねかけ、いながけという。ハセはハデとかハザ、ハサあるいはカケバナなどという設備で、稲を乾燥させるための稲架のことを指している。田の中に設置したり畔に設けたりするが、乾田では運び出すときに便利な近くの田の中、湿田の場合には田の畔に立てる。いずれにしてもまたムギを避けて、倒れにくく風通しのよい場所を選ぶ。横になる竿は竹を使うことが多く、これをナガという。ナガをおき、その長さに見合った所に食い違いにボックイ（杭）あるいはボッコイともよぶ杭を立てて設置する。この作業をハセユイといい、もっぱら男の仕事である。ボックイにはクリやマツ、スギなどの水に強く腐りにくい木を山から抜き切りしてくるが、ふつう傷むまで使う。稲のかけ方には「挟めがけ」、「一段がけ」、「二段がけ」、「逆さがけ」、「横がけ」、「おもてがけ」など種々の呼称がある。約十五、六日間ハセガケしておき乾燥しきってから稲を家に運びこむ。

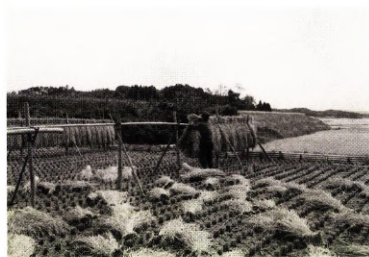
稲運び

稲を運ぶときはハセから稲束四把ずつ落とす。穂を傷めないように根元を下に向けて落としこれを三つか四つ、つまり一二把から一六把の小束をタバツラでまとめたものを一把とよんでいる。これが六把で一段と数える。一段は馬の背で一度に運ぶことができる量であった。タバツラというのは藁のミゴとミゴとを結わえてつくる細い藁束のことである。

家に運びこんだ稲は、縁側とか軒端に重ねておき湿気ないように気をつける。昼間稲を運びこみ、ヨワリをしながら二ワで稲扱きをするのがこの時期の生活であった。家に搬入するのは一晩に稲扱きができる程度の量にする。



【写真25】 ハセ杭置場



【写真24】 ハセがけ 現在でも稲架で乾燥させる人もいる。杭をボックイ、横に通す竹をナガと称する（提供 後藤助一郎）

稲 扱 き

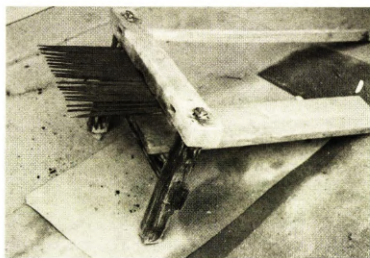
稲の脱穀（稲扱き）はムギまきを終えてからの作業である。昭和七年生れの話者が覚えていいるころは、すでに足踏み脱穀機や人力で回す脱穀機を使っており、もはや千歯扱（せんしば）を使うことはなかったが、千歯扱は家族に一人一台分くらいの台数があったという。

稲扱きの作業は十一月にはいつてからユイでおこなったものである。ヨワリ作業で毎晩遅くまで続けた。足踏み脱穀機で扱いたものには稲穂のまま落ちるものもあるで、それを集めて稲打ちでたいて稲を落とす。

稲打ちは柄のついた植状の道具で、打面に凹凸がついている。

扱ききれない稲穂や落穂は拾って置いて乾燥させ、（わら） 筵（むしろ）の上でタンガラブチボウ、ボツツアラブチ、あるいは稲ぶちとよばれる道具でたいて扱き落とす。扱いた稲には塵が混じっているで稲のフルイにかけてから、さらに唐箕にかけて稲と塵、未成熟の稲を選別する。扱き終えた稲はエンメエ（家の前）に藁をしいた上に筵をしき詰めておき、（ざら） 簀（ざら）に集めた稲を筵の上に広げて稲を乾燥させた。

稲刈りの脱穀作業は早くから機械化しており、根宿のG家では昭和三十一年（一九五六）には他家にさがけて自走式の自動脱穀機（自脱とよぶ）を導入し、ほかの家の脱穀も請け負った。



【写真26】千歯こき 過去の農具となったが、種稲を採取するときに千歯こきでていねいに扱く人もいた（提供 後藤助一郎）



【写真28】モミぶち ボツツアラブちともよび、稲だけでなくムギなどの穀物の脱穀に使う（提供 円谷和二郎）



【写真27】足踏み脱穀機による稲の脱穀（昭和50年 提供 大野弘美）

モミスリ

モミスリ（粃摺り）は粃殻をとり去って玄米にする工程で、一般にはドズルス（土摺臼）を使う。ドズルスは竹で編んだ籠とネバ土を使つてつくる白で、上臼と下臼にわかれていて両者のあわさり目には木製の歯がついている。これは二人で作業しなければならず、時間と労力を必要とした。一方動力の粃摺り機は昭和十年代に生れ、早くからこれを導入した家もあつて、他家の粃摺りを請け負つたりもしていた。動力の粃摺り機は能率がよく、一俵分を一分くらいで摺りあげるのどうかしてはおられず、俵詰めをして運ぶ粃運びも一軒ではとてもできないので、ほかの家にも手伝いをお願い三軒くらいでおこなつたという。

粃摺りの後は唐箕で粃殻や塵をとり去り、さらに万石にとおして未成熟のシイナを選別した。唐箕は内部の羽根を回転させて人工的に風をおこし、その風で選別する用具で江戸時代中期に中国から伝来して国内に広まつたといわれている。また万石は千石通しなどとも称する選別用具で江戸時代に考案されたものであつたが、いずれも改良が進んで各地の小さな工場で作られ流通していく。

奉納された 本村の根津神社（根津権現）はソラデ除けの神様で周辺から多くの参拝者があつたが、ここに二基の唐箕と一基唐箕と万石の万石のミニチュアの模型が奉納されていて、この種の奉納物の類例はないため大変貴重な文化財である。いずれにも墨書銘があり、唐箕の一つには「奉納 明治廿二年十月廿六日 新潟縣下西蒲原郡□□」、もう一方の唐箕には「奉納石川郡須釜村 願主 阿部極 明治参拾九年七月〇〇日」、万石には欠損があるが「奉納 □丑十月廿六日 □原郡小池村 □戸平民 渡邊良平」、裏面に「新潟縣下西蒲原郡小池村百七十三番地平民渡邊良平之作」と読むことができ、奉納年月日と奉納者がわかる資料でもある。新潟県西蒲原郡小池村は現在の燕市小池である。小池は農具大工の多い村で唐箕や万石の製作技術を



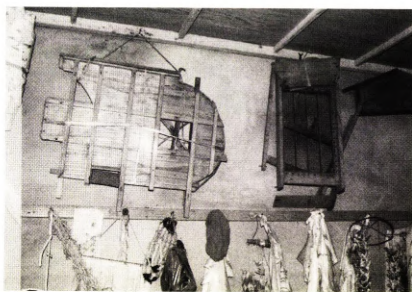
【写真29】ドズルス（土摺臼）

持った者が各地に赴き、しろうとはつくれぬいそうした農具を製作して商売していたものと推測でき、渡辺良平はその一人であった。一方の阿部極は玉川村須釜の人で、この人は地元の職人が願

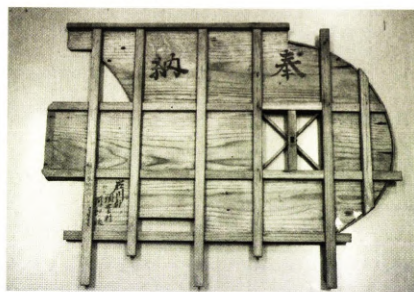
主とあることから、自らが製作したのではなくつくらせて奉納したものとも考えられる。詳細は佐々木長生「奉納農具からみた民俗技術の伝播」『民具研究』一三〇（日本民具学会、二〇〇四）を参照されたい。唐箕の一つは墨書が摩耗まちうしていて読み難い。佐々木は唐箕の一つを明治廿六年と読んでいるが、万石と奉納日が同一であり、加えて奉納者が同一人物であると仮定するならば、丑年は明治廿六年ではなく明治廿二年であることから、明治二十二年（一八八九）と読むべきであろう。

俵 詰め・玄米は俵に詰める。俵には玄米を一六貫目いれてエンザで蓋をし、縄でしばって供出した。家で使う分は大正保管・米つき 時代までは籾のまま保管していたという。当時は土蔵や納屋にセイロとよばれる一重ね五俵ほどはいる木の箱があり、ここに籾摺りをせずに籾のままおさめておいた。

昭和になってからはセイロから四石ほどはいる大きなブリキ缶にわり、缶に保管するようになっていく。古くは状況に



【写真30】 奉納された農具櫛形（根津神社）
右が万石、左が唐箕である。唐箕は二基が重なっている



奉納唐箕



奉納万石

じて粃摺りをし米をついていたが、昭和三十五、六年ころには家族が一年分食べる分の米をついてしまふようになった。一年に一人四俵を消費するので、家族の多い時代には大量の米を保管しておかなければならなかったのである。米をついた直後はあたたかいのでさましてから缶に納める。

一般には一年分ひいてしまふが、余分に米があるような家では夏ヒキといって、その年の米のでき具合を判断して夏にスルスひきをした。

藁の保管と利用

脱穀した後の藁は屋敷内の空地にワラボッチに積みあげ、屋根をかけて濡れないように保管し藁細工などに用いた。藁の利用は多様で、ハレの注連縄から履物まであらゆる生活の場面に用いられており、「藁細工」と称して、正月過ぎから二月一杯までの農閑期のあいだに普段用いる藁製品をつくる。稲づくりに欠かせない米俵はコマギとよぶ重石のついた俵編み機で円筒部分のコモをつくり、両側につける円形のエンザも編んでおくものであった。なお以前の稲は丈が高く藁細工に向いており、現在の品種に比べると一尺近くも長かった。収量は少ないが背丈の伸びる稲を藁細工用にわざわざ栽培する家もあった。

二〇〇四年の稲作

稲作は技術や社会の変化に応じて変貌をとげ、本文で示したような伝統的な稲作は今では過去のものとなった。ここでは根宿の後藤助一郎さんが撮影した平成十六年（二〇〇四）の稲作のプロセスと作業内容を示しておくことにする。



【写真32】小さなワラボッチ



【写真31】米俵
米の検査をしている（提供 浅川富士子）



【写真33-5】4月18日 種をまいた苗箱に土をかけ、ビニールハウスにいて5・6日間保温マットをかけて温度調節をする



【写真33-6】5月上旬 苗が育つ



【写真33-7】4月下旬～5月上旬 田んぼの耕耘。秋にもおこなう



【写真33-8】4月下旬～5月上旬 田んぼの肥料散布



【写真33-1】4月5日 種を水にひたす



【写真33-2】4月13日 苗箱に土をいれて播種の準備をする



【写真33-3】4月16日 芽出しの装置にいれ、30度に温度を保ちながら2夜おき、ハトムネに芽を出す



【写真33-4】4月18日 種まき機で種をまく



【写真33-13】 5月23日 除苗剤の散布。100m×30mの畦から手振り散布をしている。田植え後10日くらい



【写真33-14】 6月10日 田植え後29日目の稲



【写真33-15】 10月上旬 コンバインによる稲刈り。稲刈り機にもさまざまな型のものがあり、状況に応じて使い分ける



【写真33-16】 10月上旬 初めの運搬。天日干しする稲は脱穀しない



【写真33-9】 4月下旬～5月上旬 機械によるクロヌリ



【写真33-10】 5月8日 代掻き



【写真33-11】 5月13日 苗の運搬



【写真33-12】 5月中旬 田植え（6条植えの田植え機）。田植え機には種々のタイプのものがある

二 畑作とくらし

(一) 畑作卓越地域としての矢吹町

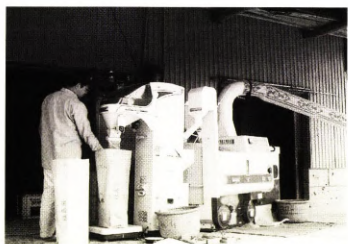
この章の冒頭の表とグラフで示したように、かつての矢吹町は水田よりも畑地が多い地帯であった(二四三ページ参照)。これは矢吹方原とよばれる水に乏しい原野の開発によって拡大した町であるため、畑地として開拓がすすめられたことによる。畑地に対し水田の比率が大きくなるのは、昭和三十年代初頭の羽鳥ダムの用水の恩恵を得ることができるようになって以降のことであった。それまでの長い間、先人たちは畑を利用してさまざまなカテ(糧)を得てきたのである。

昭和初期の畑作

矢吹町にかぎらず畑作物は種類が多く、時代による変化も多様である。昭和初期の現況がわかる資料が残されているので、それをもとに当時の矢吹町の様子をえがいてみることにしたい。



【写真33-17】 10月上旬 初はトラックから乾燥機(左奥の装置)へ送りこまれる



【写真33-18】 10月上旬 乾燥機から初すり機(右側)へ。玄米はそのままライスグレーダー(左)で選別、袋詰めされる



【写真33-19】 10月上旬 ハセがけした稲の脱穀と初の運搬

旧三神村の三神尋常高等小学校『郷土誌』には「主要生産物ハ米・麦・大小豆・甘藷・馬鈴薯・薔薇・煙草及柿等ニシテ就中米ノ生産ハ嶄然他ヲ圧シ麦作之ニ次ギテ重要ナル生産物ナリ」云々とあつて、昭和初期に当地では米、ムギ、ダイズ、アズキ、甘藷、ジャガイモ、コンニャク、葉煙草、カキを栽培していたことがわかる。こうした傾向は旧中畑村でも同様で、昭和七年（一九三二）から昭和十六年（一九四一）ころまでの農産物の統計には米、ムギ、ダイズ、アズキ、アワ、ヒエ、蕎麦、甘藷、ジャガイモ、コンニャク、漬菜、ダイコン、ニンジン、菜種、葉煙草、カボチャ、カキがあげられている（中畑尋常高等小学校『郷土誌』）。旧矢吹町（矢吹尋常高等小学校『郷土誌』）では「米麦大豆野菜ハ前後ヲ通ジ変ルコトナク盛シニ栽培」され、はやりすたりがありながらもコンニャクイモ、ジャガイモ、緑肥作物（緑肥にする目的で栽培するレンゲ、アブラナなどのことか）も栽培されていた。

三神村では昭和六年（一九三一）田地が三〇六町五反余に対し畑地が三二〇町三反余と畑地面積が卓越しているにもかかわらず米が最も重視され、畑作物はあくまでも米に次ぐ作物と考えられていた。これは矢吹町内全体にいえることであり、ムギを除く「農産物の大部分は自家用として消費」（中畑尋常高等小学校『郷土誌』）するものにならなかったからである。

畑作物の盛衰

畑作物には時代による盛衰があり、これは畑作物が安定した収入を得る対象ではなかったことを示すと同時に、畑作物の位置を低くしてきた原因の一つであろう。その盛衰を三神尋常高等小学校『郷土誌』をとおしてみても、昭和六年（一九三一）ころの旧三神村ではムギ（大麦、小麦）は明治三十四年（一九〇一）以降漸増し大正初期にピークを迎えた後徐々に減り、再び昭和三年（一九二八）以降水田の二毛作として菜種とともに盛んに栽培されはじめたらしい。ダ



【写真34】矢吹町内の畑

イズは明治四十三年（一九一〇）から大正三年までが生産のピークで以後漸減。アワ・蕎麦は開墾地の栽培作物であるが大正三年（一九二四）以降激減。コンニャクイモの栽培は旧三神村では諸根民治が明治十五年（一八八二）に栽培をはじめ、丹内忠助、佐久間源吉が奨励して明治二十年ころには全村で栽培するようになったが、明治末期に腐敗病が連続したために一旦中絶した。旧矢吹町でもコンニャクイモ栽培は明治二十七、八年（一八九四、九五）から十年間ほど流行し明治末期に廃れている。ジャガイモについても明治二十年（一八八七）ころからようやく秋熟種から夏熟種の品種に切りかわっているという。

主力のムギ以外の栽培品種は変化しており、このことは安定した質のものが生産できなかったことと、種々の農産物が安定した収入源になり得ていなかったことを物語る。

野菜を購入する

三神村では蔬菜^{そさい}は他村から購入していたらしい。「明治大正時代ニ於テハ、栽培技術未ダ幼稚ナリシモ、昭和ニ至リ大ニ覚醒^{かくせい}、品種改良、栽培法等ノ研究進ミ、茄子、胡瓜其他ノ蔬菜の移入防止ニ努ムルアリ。然レドモ未ダ他町村ニ於テ栽培セラレタル、半促成的ノ蔬菜ヲ購入スルモノアルハ遺憾トスル所ナリ」（三神尋常高等小学校『郷土誌』）とあるように、昭和初期には野菜の一部はほかの地域からはいりこんでいて、矢吹も中畑も似たような状況にあった。「金肥ノ施用年々増加セルコト、緑肥作物ヲ栽培セルコト等遅タナガラ進歩ノ状ヲ見ルベシ」（矢吹尋常高等小学校『郷土誌』）、農産物の大部分は自家消費されるが「時期により不足を生じ、矢吹、須賀川方面より移入する状態なり。蔬菜類の如き、春期より初冬まで毎日須賀川方面より商人来る」（中畑尋常高等小学校『郷土誌』）というように、農家といえども蔬菜のすべてまかなうことができたわけではなく、現代のわたしたちが最も一般的な蔬菜としてあげるようなナス、キュウリなども、場合によっては他地区の農家から買う必要があったのである。

（二）肥料づくり

肥料は畑だけではなく当然水田稲作でも使用するが、堆肥^{たいひ}と下肥についてはこの項でとり扱うことにする。ことに落ち葉を利

用してつくる堆肥はこの地方で盛んにおこなわれてきた最も一般的な肥料である。原野が広がるかつての矢吹町には、いたるところにコナラのような多くの雑木林が広がっていた。こうした落葉広葉樹は大量の落ち葉を生み、この土地の人びとは秋から冬にかけて落ち葉をかき集めて良質な腐葉土をつくらうとしてきた。

木の葉さらい

堆肥をつくるために木の葉だけではなく、陸稲の藁や麦藁なども利用したという。木の葉さらいは正月前までにおこなう作業で、降雪があるまでは毎日といってよいほど続けた。この作業は十二月が最盛期であった。木の葉を集めることを「木の葉さらい」という。このあたりでは自家の山を持っている家が多く、弥栄^{やさかい}のS家では一町三反の山の某家でも持ち山の木の葉をさらっていたが、家族だけでは手がたりず手間どりを頼んでおこなう場合もあったという。木の葉は集めやすいように傾斜面のくぼ地にはきだしてやり、集まった木の葉はビクと称する縄で編んだおおきな袋に詰めて広場のようなところで運ぶ。さらった落ち葉はなるべく多量にはいるように足で可能なかぎりかたく踏みしめてビクに詰めこむ。その木の葉を詰めたビクを馬の両脇にさげて運んだり、広い場所に縄を平行に二本並べておきその上に直角に藁をしき詰める。しき詰めた藁の上に木の葉をあけ二本の藁縄で円筒形にかくしぱり円筒形にして、それを牛車などにのせて家まで運び出した。この



【写真35】 ビク さらった木の葉をいれて運ぶ
(提供 後藤助一郎)



【写真36】 堆肥 木の葉を重ねてつくる

あたりは冬になるとイデアガル（霜柱が立つ）のでそれがけてぬかるみになる。そこで運びこんだ木の葉は庭いっぱい広げておいた。こうするとぬかるまないし、木の葉が湿って腐りやすい。木の葉を運び入れた庭は深々としたふとんのようで、この季節の当地の風物詩であったという。このあたりの家はどこでも道路から玄関までの通路には藁束をしき詰めてぬかるまないように工夫した（第一章第三節住）。乾燥した木の葉は木の葉小屋に収納しておく。また馬を飼っている家ではアマヤとか木小屋とよぶ付属屋に乾燥した木の葉を保管し、藁とまぜて夏になってから馬の寝藁としても使う。

庭の片隅には堆肥枠と称し、高さ二尺、六尺四方ほどの板の四角い枠をつくっておき、そこに庭に運んだ木の葉を詰めこむ。この作業はユイでおこなうものであった。枠の中でかたく踏みこみかためて、上に人や家畜の糞尿や厩にしいた家畜のしき草をかけ、サンドイッチ状に積みあげ堆肥枠をひきあげて高くしながら堆肥をつくっていく。

根宿のある家では昭和にはいつてから厩のちかくに堆肥盤という専用で堆肥をつくる場所をつくった。堆肥盤は底がコンクリートになっていて、四メートル四方高さが一五メートルほどの矩形的の枠である。堆肥枠と同じでこの中に木の葉を詰め厩の肥を積んでおき、設けたかたわらのタメから積みあげた肥の上に糞尿をかける。厩の肥は冬に堆肥盤に積みあげて放置し、春先の彼岸前になると「つまかえし」といって、堆肥枠に積みかえ直した。

汲みとり

人糞も肥料として重要であった。直径三尺弱、高さ二尺くらいで上部に孔があいて栓がでる肥樽があった。これをリヤカーに二つか三つつけ、町の家々の便所から汲ませてもらった。お得意さんがあり定期的にいつて汲みとったり、溜まったからとりにきてくれと頼まれることもあった。人糞は買いとるわけではないが、汲みとらせてもらうときには季節の野菜などを持参したものである。肥柄杓で汲んだ糞尿は、漏斗をつかって肥樽の孔から注ぎいれて栓をして運ぶ。自家の畑の近くにはコンクリート製の肥溜めを二つか三つくらい設けておくもので、汲んできた肥はそこにいれてねかす。水で薄めて堆肥にかけたりもする。直接畑にまく場合、元肥に使うときには水を切った濃いもの、追肥として使用するときには水で薄める。

朝草刈り

朝草刈りは馬の飼料と厩のしき草を確保するための仕事である。直接の肥料づくりではないが堆肥をつくる場合は厩の古くなった寝糞やしき草が不可欠であったし、牛馬の糞尿も堆肥をつくるためには欠かせないもので、その意味では肥料づくりに結びつく習俗であった。

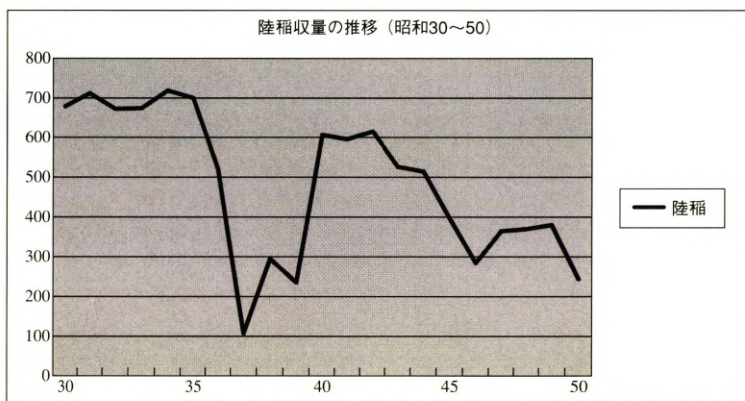
朝飯前の仕事に朝草刈りをする。草刈りに出発するのはたいいてい午前四時であるが、早い家では三時とか三時半、遅くとも五時であった。根宿ではムギ刈りが終って旧六月一日のムケノツイタチになると秋彼岸までの間は自由に朝草刈りをしてよい。そのため馬を飼育している家ではこの期間は盆の三日間を除き毎日朝草刈りをする。一人で三〇把刈るのが一人前で、刈った草は二か所タバツラでたばねる。三〇把を一段という。根宿では草を刈る場所には決まりはなく早いもの勝ちで、どこの田んぼのあぜ道の草を刈ってもよかった。また共有の草刈り場を持つ村もあったし、阿武隈川の土手の生草の競りをしたという地区もある。刈った草は馬につけて運んだが、後にはリヤカーにかわつてきた。刈った草は厩の外に立てておき、そこから馬に食わせた。桑畑に牧草をつくったりトウモロコシの葉を食わせたりもしたという。厩にしいた草は七日から一〇日くらいしてから肥として外に出し堆肥枠の中に積み重ねておき、厩には新しい草をしいてやる。

朝草刈りは盆にはいかなかったが、正月十六日と盆の十六日は「地獄の釜の蓋もあく」といって肥出しをしてはいけない日である。また使用人を里帰りさせる日であったので、当日はなにもしないでのんびりできた。そのため盆前にあらかじめ肥を出して厩の掃除をし、三日間分の草刈りをしておかなければならなかった。

(三) 畑で栽培する主要な作物

畑作に栽培した作物についての聞き書き昭和三十年（一九五五）前後のようすを記しておくことにする。なお、『福島県西白河郡中畑村弥栄部落に於ける畑作改善営農試験地事業計画書』（福島県、一九五二年四月）も参考にした。

40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
607	596	613	527	512	398	283	364	370	380	242
6410	6295	7076	7405	7266	6683	5449	6045	7007	7136	8453



雑穀屋

収穫した畑作物のうちムギ類や種子とり用のトウモロコシなどは出荷したが、ほかの畑作物の大部分は自家消費にまわし、余剰のものは売った。収穫の時期に近くになると「雑穀屋」という仲買人が農家をまわりながら先物取引の契約をとりつけていく。収穫した後トラックでやってきて収穫物を南京袋にいれて運び出したものであった。

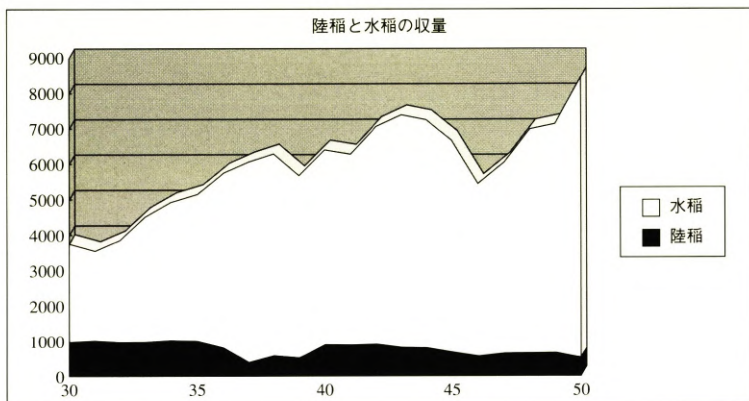
① 陸稲（おかほ）

陸稲と水稲

陸稲と水稲の収量割合を昭和十六年（一九四一）年の『矢吹町勢要覧』と昭和二十八年（一九五三）年の『矢吹町勢要覧』によってみると、昭和十六年には水稲が二九八〇石（粳、糯）に対し陸稲は五二五石で、米の一五%をしめている。昭和二十八年には水稲が三三三三石余に対し陸稲は六六七石余、陸稲は米のうちの一七%である。ちなみに昭和三十八年（一九六三）には八%、昭和四十八年（一九七三）には五%に減少する。水稲の収量は戦後は年々増加していくが、陸稲の収穫量は横ばいを続け、昭和四十年代後半には収量が減少し、水稲に移行していく農家が増えていくことがわかる。反あたりの収量は数字でみても陸稲は水稲の半分であり、食味もおちるということであれば、水利の状況さえ

【表3】 陸稲、水稲の収量（昭和30～50年）

年(昭和)	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
陸 稲	680	711	672	675	719	700	519	108	296	236
水 稲	3748	3551	3852	4513	4942	5163	5676	6076	6298	5692



改善されれば水稲に移っていくのは当然であった。

陸稲の栽培

畑作地帯では陸稲栽培が基本であった。陸稲の収量はよくとれる畑で反あたり六俵、平均すると三

俵ほどにしかない。

弥栄の場合、昭和二十七年（一九五二）ころの陸稲の品種は梗が関根、農林二二号、長柄早生、農林一五号、糯は農林糯二〇号、会津糯などであった。五月中旬に畑をうなう。五月十日から十五日ころに種まきをするが、種籾は反あたり六升から七升くらいである。ウネは低ウネにしてウネ幅を二尺五寸ほどとり、そこに五寸幅程度の溝をつけ堆肥の元肥を施して軽く土を被せる。低ウネにすると乾燥を防ぐことができるという。そこに種籾を直播する。また後、足で三分から五分ほどの土を被せて踏みつけておく。

陸稲は雨が降った日も、笠を被ってでも草とりをしなければならぬほどひんぱんに草とりと追われる作物であった。芽が出はじめのころは雑草に負けやすいので一度草とりをしなければならぬ。スモウトリ草のようにヒエに似ている雑草があつて見極めにくいので手作業で除草しないといけなかった。陸稲に比べてトウモロコシなどは雑草よりも成長が早いので草とりが楽である。芽が五寸くらいに成長すると雑草に負けなくなるので雑草がちょ

つと出はじめたころ、カルチベーターで土を寄せてやると雑草が弱る。草とりはその後六、七、八月それぞれの上旬くらいにおこなう。六月上旬、中旬の二度くらい中耕する。農林二二号や農林一五号のような早生は、枅が色づきはじめると刈りとってもよいので九月下旬に稲刈りをはじめ、品種により十月上旬くらいまでかかる。刈りとった後の稲扱き、脱穀調整は水稻と同様であった。

②ムギ

ム

ギ

ムギには大麦と小麦のほかに裸麦、ライ麦などがあるが、大麦と小麦が主要な栽培作物で裸麦、ライ麦の栽培はごく少量であった。当地方では小麦は「コムギ」とよぶが、単に「ムギ」といえば大麦を指している。ムギは陸稲やトウモロコシの後に作付けすることが多い。ただし小麦は収穫時期が遅いので裏作になる作物と重なりあうことも多く、時期によってずれてしまうと作付けの計画に組みこむのが難しくなる作物であった。昭和二十年台末ころムギの品種には大麦の場合会津四号、会津七号、細麦三号、信濃一号などがあり、小麦は農林五〇号、同じく五五号、六四号、六九号、七〇号があった。

昭和三十三年（一九五八）の小麦の収量は七四七トン、大麦が一二九七トンであるが、しだいに小麦大麦ともつくらなくなっていく、大麦の減少率がことに高い。一一年後の昭和四十四年（一九六九）には小麦三六二トン、大麦四六二トンになり、翌四十五年から激減し昭和五十年（一九八五）には小麦一四トン、大麦一〇一トンと戦前から戦後にかけて作付けされた代表的な畑作物の面影はなくなってしまう。米と混炊こんすいして利用する主食としての大麦が使われなくなり、米だけの飯になっていく過程と裏腹の関係にある。



【写真37】牛耕（昭和31年ころ 提供 渡部恭行）

ムギの栽培

種子の扱いは種子をヒヤス（浸す）ところからはじまる。ムギの種を南京袋にいれて風呂の湯に浸しておく。消毒と芽だしになる。摂氏四十六、七度くらいの熱めの風呂の湯に十時間ほど浸けておくという人もあれば、家族がはいった後の湯加減で一晩おけばいいという人もいる。ムギの種まきは秋の土用を目安に種まきするといわれており、大麦が十月上旬、小麦は十月二十五日前後である。種子の量は大麦が反あたり六升から一〇升、小麦が六升から七升である。ウネの幅を二尺五寸くらいにして、真ん中に幅七、八寸くらいの溝を掘って金肥などの元肥を施してから土を五分ほどかけ、すり足（足をすりびるという）で土とこやしをまぜたところに種子をまく。越冬させるので窒素分を少なめにする。種子は中策に二、三升ほどいれて配分しながら手でまく。矢吹は季節風が大変強い土地で、しかも火山灰性の地味の地区では厚まきした方がいいといわれる。冬に霜柱が立って土が持ちあがることを「いであがる」というが、「イデアガツ」たところに風が強く吹きつけると根が持ちあがって傷んでしまうからである。

秋には一部の畑だけを残してムギをまく。秋から春にかけてなにもつくらない畑を「春地」とよび、ここはジャガイモなどの春の種まき用に確保しておく。そのくらいくまなく畑を活用してムギをつくっていたものであった。

ムギ踏み

三神のFさんは芽が出て葉が二枚ほどになったときに、ジョリンで薄く土をかけて軽く上を踏んでいた。これは年内中の作業で「イデアガル」前に踏圧ふみあをかけてあらかじめ根のはりをよくする工夫であった。一方中畑のSさんは年内にはなにもしないで、土がしみなくなつてからムギ踏みをしたという。弥栄のSさんも十一月下旬から十二月上旬にかけてはじめのムギ踏みをしている。ムギ踏みは根のはりをよくするための作業で、ウネの方向に横になって進み、踏み残がないようにくまなく踏みつける。ムギ踏みの前に覆土ふどつまりジョリンで土を薄くかけてやるもので、「土いれ二回、踏み二回」といった。



【写真38】 ジョレン（ジョリンともいう）
麦に土をかけるときに用いる

カタギリ

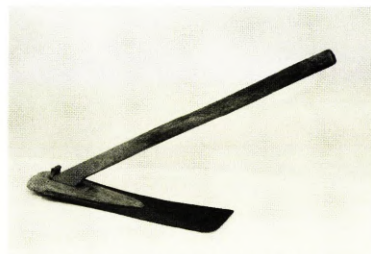
三月中旬の春の土いれのときには草むしりもしておく。三月下旬から四月上旬にはカタギリと称してウネの一方から鋤で土をほっくりかえして（掘り返して）おっ被せてやる。カタギリは二度ほどおこない、二度目は五月上旬中旬ころが目安で、草とりをしながらさきにおっ被せた側とは逆の方向から土を被せる。この時期になるとムギも成長が早くなり草むしりをしなくともよいが、六月上旬ころにもう一度草むしりをする家もある。

ムギ刈り

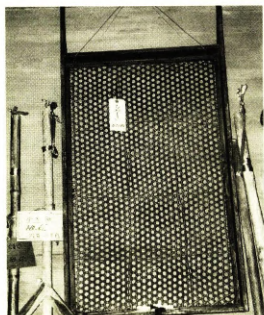
ムギが黄色く色づきはじめると刈りどきで大麦のムギ刈りは六月下旬、小麦のムギ刈りは七月上旬中旬くらいになる。ムギ刈りには専用の鎌は特になく、草刈り鎌を使う。実が落ちないように根元をしっかりと握り鎌で刈り取る。稲には株があるがムギはぞっくり生えているので、稲束の太さ程度の穂束にまとめて根元を藁でしばりそこに倒しておく。穂束は一二把から一五把まるきにしてタバツラでしばりこれを一把とよぶ。乾燥は稲と同じようにムギ畑にハセをつくりハセがけするが、三城目のAさん宅のようにハセがけせず、タバツラでしばった一把を穂を上にして立てかけて乾燥させる家もあった。ハセは運び出すのに便利になるべく道路際に設ける。乾燥の目安は特にないが、三神のFさんは株に手を差しこんでみて湿り気の有無で判断した。

ムギの脱穀調整

ムギの脱穀は七月下旬から八月上旬にかけてユイを借りたり手間取りを頼んで多人数でおこなう。機械を持って農家を廻り脱穀機械を賃貸する人もいた。機械を動かして抜き、生乾きのまま機械にかけるとミゴが扱き胴にひきこまれて絡まり、機械を止める時間ばかりなくなってしまう。足踏みの回転胴は粃のノゲツボがとれないので手間がかかる。機械で脱穀するときも穂がついたまま落ちるものもあるので、こうした二番にでたものは畑の落穂と一緒にしておき、好天のときに筵に広げて乾燥させてからボツチャラブチ（ボツツアラブチともいう）をした。ボツチャラブチというのはブチボウ（打ち棒）とか初たたきともいい、樹木を切りその幹と幹から生えた枝を使いつくる。枝を柄にして幹の側を打面にする。打面



【写真39】鋤（フコ鋤） 別にカナ鋤もある



【写真40】四角形のモミフルイ

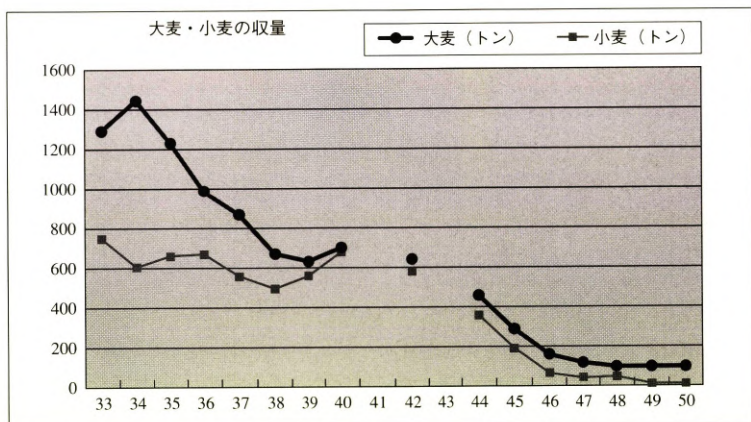


【写真41】唐箕（とうみ）
種々の穀物の選別に用いられてきた

全体を打ちつけるようにしないと効果がないので、慣れるまでは難しい。ムギのポッチャラブチをするとノゲツボやゴミが着物の中にはいりこんでイラツコイ（いがらっぽい）。
ポッチャラブチしたムギはモミブルイ（粉ふるい）であるい、ゴンドをとる。ゴンドとは藁くずなどの大きなゴミのことをいう。モミブルイは直径二尺程度で目が一センチくらいである。ふるった粉は唐箕にかけて粉と細かいゴミを選別し、調整が終了してからもお庭にこぼれた粉やゴミなどを集め、箕を使って粉をわけた。粉は天気の良い日に庭に広げて二日ほど乾燥させてから仄に詰め

【表4】大麦・小麦の収量（昭和33～50年）

年(昭和)	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
大麦(トン)	1297	1444	1234	987	875	675	638	693		647		462	290	163	119	101	100	101
小麦(トン)	747	602	663	670	564	495	560	681		580		362	194	66	43	46	14	14



た。吠の前には俵に詰めたという。かつては吠も容易には入手できないので、肥料をいれた吠を池にしばらく浸けておいて乾燥させ再利用したものを使った。

ムギ・ムギ藁 自家用のムギは精麦して米と混炊し、普段の主食として食べるが、陸稲の米はまずいので、ムギだけの方がむしろおいしかった。ムギ藁は馬のしき藁にしたり、肥料に利用した。

③菜種

菜 種

菜種は村内で搾油^{すく}して家庭で自家消費した。菜種栽培は弥栄のS氏の話をもとにしている。戦後まもなくS氏は弥栄の農家数軒が食糧増産推進員に選ばれ、柴田昌英という人の指導を受けた。当地は土地が悪いやせ地なので、とれたのはサツマイモとジャガイモくらいであったので、勧められて菜種栽培をはじめたという。

菜種の栽培

菜種は昭和三十八、九年ころまで栽培を続け、栽培末期には品種は「東北二七号」に統一されていた。品種としてはほかに北海道種、農林一六号があった。菜種は二毛作の裏作として栽培する場合は、年によっては稲を刈りとりないうちに種まきをしてしまうこともあった。またトウモロコシや陸稲の間に種をまくこともある。以前は九月中旬が秋祭りであったので、秋祭りを目安にして種をまく。二・五尺ほどのウネをつくり中に溝を掘って元肥を施して種をまく。株は一本立てと一本千鳥とがあつて、一本立ての場合株間は六寸から一尺、千鳥では五寸幅にして一尺程度の幅でまき、五分程度の土をかける。発芽後十月下旬に間引きと補植をしておく。

菜種も冬にはイデアガツてしまうので、厚まきをしてそれに備えた。そこで春になり暖かくなつて土が凍みなくなつてから、カルチベーターなどで中耕し土寄せをするが、中耕、除草の時期は二回で、三月下旬と四月中旬あるいは四月上旬と五月上旬ころになる。

菜種にはワセとオクがあるが、六月下旬から七月上旬が収穫の時期であつた。菜種は下部から花が咲きはじめて実を結ぶが、

先の方に少し花が残る程度になったらひき抜き、鎌で根を切り落とし畑の脇に一日か二日くらい地干しする。乾燥したところをみはからい、一か所に集めて重ねておき屋根をかけて雨にあたらないようにしてしばらく放置する。乾燥しきつたところで運びこみ藁の上に洪紙をしいてその上で脱穀機を使って脱粒する。脱粒する際にもなるべく踏みつけて落とすようにしたという。落とした実は篩^{かき}にかけたり唐箕^{たから}を使ってゴミをとばして仄^{ひら}に詰めて出荷した。

菜種の幹は堆肥にしたり燃料にした。菜種にかぎらずトウモロコシの幹や豆幹、煙草の幹など燃すことができるものは燃料にしたものである。

④そのほかの畑作物

ジュウネン

ジュウネンは荏胡麻^{えごま}のことである。菜種の後作として六月上旬から中旬の間に、反あたり四合から八合の割りあい種をまく。菜種を収穫した直後の七月上旬に追肥をして中耕。七月中旬、八月上旬に草とりをして、十月中旬に鎌で刈りとる。刈りとった枝は適当な本数を畑に倒して重ねておき乾燥させる。ジュウネンは上からみると枝が十文字に出ているので、重ねておいても枝同士が接触しないのですぐ乾燥する。しかしうっかり動かすと種がこぼれ落ちるくらい脱粒しやすいので、畑に藁を運んできて手でたたいて落とす。ジュウネンは先端の方から実を結ぶ。下の方まで色づいてから種を収穫しようとする先端が脱粒していることもあるので、下の方の実が青いうちに一度ぶつて収穫し、二番ぶちといってしばらくおいて下の方が色づくのをみはからい再度実を収穫するといふ。ジュウネンは実をぶつときの見極めが難しい。

トウモロコシ

トウモロコシをこのあたりではトウミギという。根宿ではう家などで出荷用にトウミギを栽培していたが、昭和二十五年（一九五〇）以前は赤いトウミギを栽培し、その後は北海道に飼料用トウミギの種子とり用のトウミギを栽培するようになった。

弥栄の某家ではホワイイトデントコーンとイエローデントコーンの種子用のトウモロコシを栽培した。デントコーンは馬齒種と



【写真42】乾燥中のトウモロコシ（提供 後藤助一郎）



【写真43】トウモロコシの刈りとり

いう品種で、このあたりではバハ（馬齒）トウミギともよんでいた。飼料用のトウモロコシで青いうちに刈り取ってサイロで発酵させて使う。トウモロコシは交雑しやすい。ムギやジャガイモの間につくる。小麦の間作の場合はウネの幅は二尺三寸から二尺五寸、株間は二尺五寸くらい。ジャガイモといっしょにする場合にはウネを五尺弱と広い。株間は一尺五寸。

小麦の間作では五月下旬から六月上旬に小麦畑のウネの間を耕して播種^{はし}する。ジャガイモの間作ではジャガイモの下^{しも}の葉が黄色くなってきたころを目安に種をまくが、時期は六月中旬である。小麦畑に植えたものは六月

下旬と七月上旬に中耕、ジャガイモ畑の場合は七月中旬と八月中旬にうなう。草とりは七月中旬と八月中旬の二回くらいである。七月二十日ころ追肥をし、九月中旬にトウモロコシの間に菜種をまくので、じゃまにならないように下の方の葉をとって飼料にしたりする。十月の中旬に収穫するが収穫のときは籠を背負って畑にいき、実をもぎとって背中の籠に投げいれていく。もぎとったトウモロコシはむいて皮はつけたままにしておき、その皮で四本から六本を一緒に結んで竿にかけて乾燥させる。乾燥したものは冬場になってから冬仕事に種子をとった。

乾燥したトウモロコシは手でもいだが、まてい（ていねい）な人は上下の両端を掻きとってからもいだ。手作業は大変なので後には種子をもぐ器械ができた。もいだ種は筵に広げて乾燥させるが、そのときに動かしながらずものなどを選別する。乾燥した種は吠にいれて出荷したが、袋も吠から麻袋にかわった。

トウモロコシの皮は細工物にも使われ、和紙の生産が盛んであった上、下川崎などでは、和紙づくりが衰えたときに当地のトウモロコシの皮を持っていて、学校の上履きとして需要が多かったキビカワジョウリ（黍皮草履）づくりをしたこともあった。

ジャガイモ

ジャガイモ（馬鈴薯）の品種は男爵、農林二号などで自家のイモを種イモとして使う。四月上旬に畑をうなう。ウネの幅は二尺五寸程度にして、ウネに溝をきって堆肥と金肥の元肥をほどこしておく。四月中旬から下旬にか

けて種をまくが、ジャガイモの種は芽の出たイモを二つに切り、切り口に木灰をつけてウネの溝に一尺ほどの間隔で植えていく。追肥は五月中旬。ジャガイモは一株から何本もの芽がでるので、五月中旬ころまでによい茎を三、四本残す。中耕は芽が出てからと五月下旬におこなう。七月下旬に三本鉤で掘り起こして収穫する。

ダイズ

ダイズのことを「おおまめ」とよんでいる。ダイズは小麦畑の小麦のウネの間につくることが多かった。種まきの時期は六月十日から十五日あ

たりで、種子は反あたり二から三升必要であった。ムギのウネは二尺五寸ほどであり、ムギのサクリを切つてあるので、ムギ畑のウネとウネの間をさくつて、八寸から一尺ほど離しながら二、三粒ずつまいていく。七月中旬と下旬の二回除草、中耕をおこない、十月中旬収穫となる。ダイズは鎌で刈つたりひき抜いたりして、それを畑の中に円錐状に立てかけて乾燥させる。乾燥したものは家に運びこみ、ひき抜いた場合には押しきりで根を切つてから筵の上に広げて、ブチボウやクルリで打った。これを「マメぶち」という。朝のうち筵の上に並べて乾燥させ、しばらくしてから打ち、それをそのまま裏に返して下側を乾かしておいて作業から帰ったときに再び打つとよい。収穫したマメはふるいで振るって唐箕にかけてゴミを飛ばす。「おおまめ」は豆腐や味噌など用途が広い。豆幹は燃料にした。



【写真44】マメぶち むしろの上でクルリを用い、マメをおとす

三 養蚕と葉煙草栽培

矢吹町の農家の副業は時代により変化があるが、ここではかつて副業の柱とされた養蚕と葉煙草栽培とをとりあげてみたい。

(一) 副業としての養蚕

① 矢吹町の養蚕

この地方の主業は稲作と麦作で副業は養蚕業であった。「一戸当二町歩の耕地を有し、一世帯五人五分の家族、この耕地をおおよそ凡三人にて擔(担) 当する本村においては、主業たる米麦作と唯一の副業たる蚕にて生計を立つる有様なれば、昨今の如く米價(価) 繭價(価) の下落に会つては、その不況を第一線に味はざるを得ず 云々」(中畑尋常高等小学校『郷土誌』)とあるように、昭和六、七年前の当地の農家経営は単純であった。現金収入は養蚕に依存せざるを得ず、この記述にあるように昭和五年(一九三〇)からはじまった昭和恐慌の波を被り、米価と繭の値段が下落し農家は経営が困難な状況に陥っていたことが理解できる。

矢吹町の養蚕の嚙矢こうしについてはわからないが、文政年間(一八一八―三〇)の矢吹宿旅籠の紹介に「奥州矢吹宿 伊達信夫種衆御定宿 冬木屋六右エ門」(『矢吹町史1通史編』)とあって、養蚕地帯の伊達信夫からの蚕種屋(種衆)が宿泊する定宿があり、冬木屋を拠点に蚕種屋が活動していたことをうかがわせる。少なくとも江戸時代に養蚕がおこなわれていたことは間違いない。

大正三年(一九一四)の蚕の飼育戸数(『矢吹町史3資料編Ⅱ』)をみると表のようになる。こうしてみると盛んに養蚕がおこ

なわれていた。また夏蚕は少ないが春蚕と秋蚕に力をいれており、中畑と矢吹では秋蚕、三神では春蚕の飼育が若干多い。

中畑小学校『郷土誌』には昭和七年（一九三二）から十六年（一九四一）までの中畑村の「蚕業生産物数量」が収録されている。これは繭、玉繭、そのほかの繭も含めたものであるが、そのほかの繭の統計は出ていない年が多いので、繭と玉繭の合計を示しておく（表6参照）。

春蚕が霜害で全滅した昭和十三年（一九三八）は夏蚕と秋蚕の飼育量が突出しており、春蚕を補うために夏秋蚕の量を増やしたものであろう。なお「蚕業生産物数量」では昭和九年度以降のデータは夏秋蚕を合算した数値になっている。

【表5】大正三年養蚕農家数

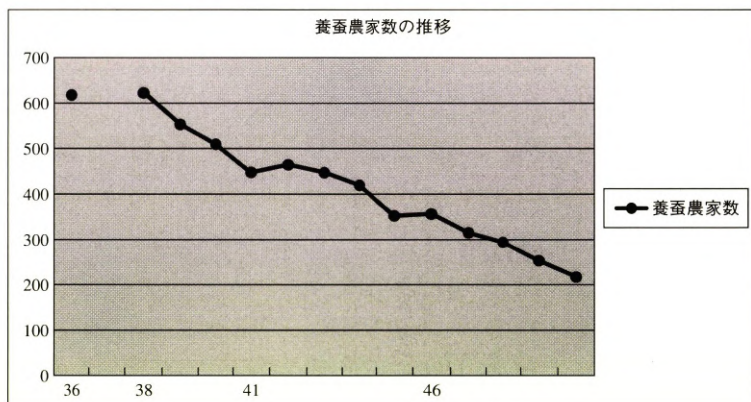
町 村 名	春 蚕	夏 蚕	秋 蚕	延べ戸数
中畑村（農家数）	205	160	220	585
三神村（農家数）	331	56	321	708
矢吹町（農家数）	110	80	120	310

【表6】中畑村蚕業生産物数量

年 度	昭和7	昭和8	昭和9	昭和10	昭和11	昭和12	昭和13	昭和14	昭和15
春 蚕（貫目）	3437	4036	6215	4358	3537	3691	霜害	6342	5446
夏+秋蚕（貫目）	3797	4491	4620	4650	5340	5500	7026	4312	9008

【表7】養蚕農家数の推移

年(昭和)	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
養蚕農家数	617		622	553	510	448	464	449	420	352	357	315	294	252	219



昭和七年（一九三二）は年間二六、七トン生産しているが、内訳をみると春蚕は三四三七貫（一万二八八八・七五グラム）で年間総量の四六％、夏蚕八四三貫（三二二〇グラム）同一二％弱、秋蚕二九五四貫（一万一〇七七・五グラム）同じく四一％となっている。昭和八年が四〇三六貫、昭和九年六二二五貫、統計には春蚕、夏蚕、秋蚕が示されている。春蚕は年間の繭生産量の五〇％近くを生産していて、この地域では春蚕が農家収入の重要な部分を占める傾向にあった。

しかし昭和三十八年（一九六三）以降は養蚕農家は減り続け、養蚕は衰微の傾向に向かう。ここが矢吹町の人びとが長い間共生してきた副業としての養蚕から離脱しようとした転換点であった（表7参照）。

②ある農家の昭和五十年の養蚕

町内の某家に昭和五十年（一九七五）の養蚕の記録が残っているので、これを使い当時の養蚕農家の養蚕の規模と収支などについて紹介しておきたい。

昭和五十年春蚕の孵化した毛蚕の掃立て量は一〇グラムであったが、二眠までは共同飼育場に預けて育ててもらい、五月二十八日に二眠の段階で飼育場から自宅に配達されて飼育がはじまった。三日目の五月三十日に三眠にはいり「桑つけ」をおこなう。この段階までは稚蚕（ちさか）ワラダを用いる。六月三日に四眠、四眠で丸ワラダにとりかえて「桑つけ」する。六月八日に五眠目にはいり、五眠にはいるとその段階までの室内飼育から野外飼育になり「桑つけ」をする。六月十七日に上簇（じやうさく）したのでマブシに移すが、蚕の量はマブシ一枚につき一升枘に一杯分であった。蚕はマブシで繭をつくりはじめ、マブシから繭をむしりとる「繭はがし」をするのは六月二十五日であった。同時に繭のけばとりをして袋詰めし、蚕が届いてから一か月経った六月二十八日にできた繭を生産組合に渡



【写真45】稚蚕共同飼育場掃き立て（昭和46年）

している。

昭和五十年の春蚕は一〇グラムの蚕種から四万四〇〇〇^{キログラム}の収量があった。収穫した繭は上繭（キロ一五三〇円）、くず繭（ウス皮はキロ一四〇円、親玉はキロ三八〇円）にわけられる。合計で六万一千八百二十円の収入があったが、種代二九〇九円、飼育料二回分二五〇〇円、生産割九二九円、指導料九七〇円、共済金九二六円、四寸の練戻袋代（一袋九〇〇円）、丸ワラダ用の丸紙代（一枚二〇円）などの諸経費を差しひかなければならない。また温度をかけないと繭ができないので、燃料代も経費として含める必要がある。

上繭の単価は春蚕と夏蚕、秋蚕で違っており、春蚕は夏、秋に比べて単価が高い。ちなみに昭和四十九年の春蚕上繭はキロあたり二二〇〇円（夏秋蚕一〇〇〇円）、五十年春蚕一五三〇円、五十一年春蚕一九〇〇円、五十三年春蚕と翌年の春蚕は同額で二一四〇円であった。

③養蚕のプロセスと民俗

ここでは中畑地区（Q家の聞き書きをもとに養蚕の手順を述べてみたい。この家では昭和四十六年（一九七二）に都合により桑畑をやめてしまったため養蚕もこの年からやらなくなっているが、前年の昭和四十五年（一九七〇）までずっと養蚕を続けていた。

養蚕の回数と繭の納入先 蚕のことは「かいこさま」とよんでいる。養蚕が盛んな時分にはQ家では春蚕、夏蚕、晩秋蚕、晩々秋蚕と年に四回ほど飼ったものであるが、春蚕を「春っこ」、夏蚕を「夏っこ」、晩秋蚕のことは「晩秋さん」、晩々秋蚕を「晩々さん」などと称した。多い家ではこれに「初秋蚕」をいれて年に五回とったという。



【写真46】野外飼育 5 畝からは野外に設置した飼育場で飼う

中畑村の根宿には県の養蚕指導所があつて指導員がおり「先生」とよんでいた。また須賀川の笠原製糸からも指導員の「先生」がきており、ときに応じて助言をしてくれた。なお矢吹町の養蚕農家には笠原製糸のほかにグンゼ、昭栄製糸、伊達蚕糸などの会社はいっていた。

掃き立てから Qさん宅では春蚕は五月中旬に掃き立てをして、ひと月弱つまり六月中旬に上簇する。暑い季節の夏蚕は七上簇までの期間 月下旬に掃き立て、掃き立てから上簇までの期間が二五日くらいで春蚕などより二、三日早くひける。晩秋

蚕は八月下旬掃き立て、九月下旬上簇、最後の晩々秋蚕の掃き立ては九月上旬で九月下旬上簇というサイクルであつた。

養蚕のこつ

手いれ次第ではかの家よりも上簇する期間を短縮することができる。手いれの良し悪しというのは技術の上手下手蚕を飼うのが上手な家に三眠あたりまでおかせてもらい、その家に通つて上手な人と同じ周期で餌をやるなどしてそのこつを習うこともあつた。「かいこ半作」などといって、飼いはじめから半分くらいまでの期間の世話が大事で、それが繭のできを左右するといわれる。真夏には蒸れるときがあるので、換気をうまくしないと下手をすると全滅してしまうことがある。また乾燥する時期にはのほりを濡らしてかけてやるなどの気遣いが必要であつた。「おおかいこは二代続かない」といういい方もあり、養蚕は大変な作業なので親の代に大規模に養蚕をすると、子の代にはその苦勞を知っているので規模を広げないという意味だという。

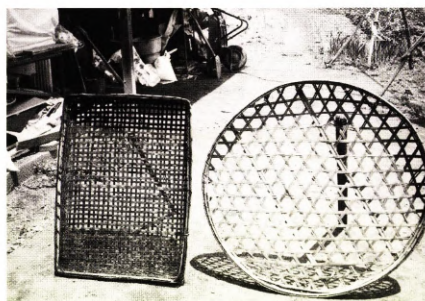
催青と稚蚕の育成

自家で種紙から催青（孵化）させたという話は聞くことができなかった。すでに養蚕農家に製糸会社から催青した稚蚕を届けてくれる時代であつた。種紙にべったりついている状態で、製糸会社の「先生」（製糸会社の養蚕の指導員）が養蚕組合の世話人宅に届けてくれるので、そこから家に持ってくる。卵からウムレタ（孵化した）ばかりの蚕は真っ黒な小さい毛虫である。種紙で孵化した状態のときに桑をかけてやる。この段階の桑は柔らかいところを選び、桑切り包丁で専用のまな板を使って桑の葉を重ねて細かく切ったものを与える。種紙に桑を与えると蚕は桑をめがけてあがつて

くるので、桑の葉にのって食べはじめるころ、鳥の羽根を使って種紙からワラダに掃き落としてやる。ワラダには真ん中に丸い蚕座紙をしいておきそこで稚蚕を飼うが、掃き落とすときは羽根を使わないと種紙からうまく蚕座紙に落としてやることができない。

稚蚕の段階で蚕座紙をとりかえるときにはワラダと同じ大きさの糸で編んだ網を被せ、その上に桑をかける。こうすると蚕は網の目を抜けて新しい桑によじのぼってくる。あがつたところで網をあげて蚕座紙をとりかえる。糸で編んだ網は編み目が一センチくらいメートルの小さなもので、稚蚕のときだけ使う。

ワラダ籠、ワラダ籠は蚕を飼う場合には不可欠な籠で、大量に保管しておいた。網、マブシ また上簇したときに使うマブシ籠も必要である。使っているうちに傷む籠も出るのでときどき籠屋を呼び日当を払ってつくってもらう。材料は養蚕農家の自宅の竹を用いる。ワラダ籠にかける網は稚蚕の場合のものは購入するが、その後使う網は自家製である。藁で編む網なので傷みやすい。この藁を「網藁」と称し蚕の網藁専用に栽培しておくものであった。橘種の稲で実はあまりならないが丈がよく伸びる稲で、網藁にすることを目的にこの養蚕農家でも苗代の隅の方で栽培していた。マブシに関しては回転マブシとその前の折りマブシ以前の形態はわからないが、折りマブシは以前はマブシ折り器を使って自家でつくった。



【写真48】ワラダ 左は稚蚕用の角ワラダ、右は成蚕用の丸ワラダ（提供 大野弘美）



【写真47】種紙養蚕は種紙についている卵を孵化させることから始める

室内飼育と

野外飼育

Qさん自身飼いはじめてからは室内飼育は稚蚕の段階でその後は野外飼育であった。野外飼育は屋根のついた三〇センチメートルくらいの高さの箱状のもので、庭先においてその中で蚕を飼い温度調節のために屋根は開閉できる構造であった。もともと家の中で飼うもので、養蚕しやすい家のつくりになっていた。このあたりの農家は本来座敷でも畳をしくのは正月と盆くらいで、ほかの季節には寝間の一角や土蔵に畳を重ねておいたもので、普段は板敷きのままであった。従ってすぐ使うことができる。また各部屋には五寸に八分くらいの柱を立てることができるよう天井にもほぞ穴がうがっており、その柱を二間に二本の割り立て、柱にあいた孔に竹竿をおして棚にし、そこにワラダを収めることができるようになっていた。棚は一〇段くらいになるがはじめから全段使うわけではなく、上蒔してから踏み台を使って上の段を利用する。

家の中の飼育

蚕座紙をしいたワラダに蚕を飼うが、一日に一度はワラダの掃除をしなければならない。ワラダに網をしきその上に新しい桑を与えると、蚕は勢よく桑を食べにあらがってくる。網の上の桑に蚕があがってから網の下の蚕座紙を抜いてコクソや桑の食べかすを捨ててやるが、籠は重くて苦勞する。コクソはすべてを捨てるのではなく一部を乾燥させて保存しておく。これは秋に菜種の種をまく際に、すこし湿り気を与えてから菜種の種とまぶして肥料として使うからである。



【写真50】屋内で蚕の飼育（提供 後藤助一郎）



【写真49】養蚕部屋のなごり 蚕は家の中で飼っていた。ワラダをおく棚を設けるための孔が天井の根太に残っている（提供 高久喜造）

桑 つ み

蚕は大きくなるに従って旺盛な食欲をみせるので、頻繁に桑をとりにいかなければならない。Qさんは養蚕の忙しい時期には奥さんと桑畑で朝から晩まで家に帰らないで一日中桑を摘み続けなければならなかったこともある。それだけ大量に飼育し頻繁に給桑した。桑は両手の指に鉄製の爪をつけて、届くところは両手で桑の葉を摘むので早い、高い枝になると片手で枝をたわませて摘まなければならないので摘む速度が鈍る。蚕がちいさいうちは摘んだ桑の葉はハケゴのような形をした背負いひものついた桑摘み籠にいれても間にあうが、大きくなると一斗五升いりの大箆に摘み、籠に葉を詰めて箆を籠の上に蓋のように被せて家を持ち帰る。

持ち帰った葉はすぐに桑置き場に広げジョウロで水をかけておく。籠にいれたままにしておくと桑がはてつて（蒸れて）しまう。乾燥した葉は蚕は食わない。ジョウロの水をかけても乾燥するようなどときには、五月節供に初誕生に贈ってもらったのほり旗の古いものを水にぬらしてかけるとよい。

Qさん宅では桑畑は六、七反歩あったが場合によってはそれでも桑が不足することもあった。不足するようなどときは親戚の家に頼みこんで、畑境に目印に植えてある桑をもらったり大木になった桑の木から摘んできた。

蚕の活動と呼称

蚕は活動する時期と脱皮するために休眠する時期とが交互にあり、活動して盛んに桑を食う時期を「おきる」という。それに対し活動を止める時期を眠というがこのあたりでは「眠る」「寝る」といつている。大信村では孵化した幼虫をケゴ（毛蚕）といい、休眠して起きると二齢の幼虫になるがこれがシシゴ（獅子蚕）である。獅子蚕に給桑すると二眠となるがこの二眠を獅子のヨドミと称する。三齢の幼虫をタカゴ（鷹蚕）、三眠して四齢の幼虫がフナゴ（舟蚕）、四眠にはいることを舟のヨドミ、五齢幼虫をニワゴ（庭蚕）とよんでいる。この後給桑して数日で桑を食べなくなり、これをヒキ



【写真51】桑つみ籠（提供 後藤助一郎）

コという（『大信村史3 民俗編』）。このように隣接する大信村に蚕の細かな呼称があるところをみると、確認はできなかったが矢吹町でも同様な呼称があると思われる。

上 族

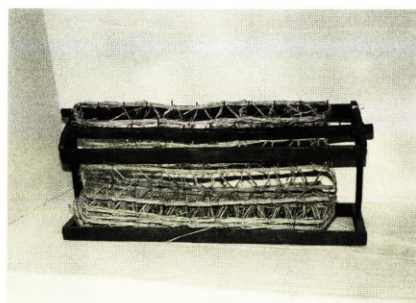
上族することを「ひける」という。「ひける」きざしは蚕の肌の色でわかる。盛んに食べているうちは肌は緑色がかっているが、五眠おきてからはしだいにだいたい色にかわってくる。こうなると「後二日か、三日かな」とか「ひけるから、人頼んでくつかん（人を頼んでくるから）」というように上族の準備にはいる。

上族した蚕はカルトンとよぶ直径三〇センチメートルほどの紙でできた鉢のような容器を掌にのせて、ひけた蚕を片手でそれにいれていく。このカルトン一つにてんこ盛りにした蚕を単位にしてマボシにいれる。ヒケルときには人を頼んで一斉におこなう。

マボシは新聞紙をしいたマボシ籠にいれておく。マボシ籠は縦一メートル、横六〇センチメートルくらいの大きさのヤマシノ（篠）で編んだ籠である。マボシを収める容器で下に新聞紙をしいておく。カルトンにいた蚕をここにいれてやるとマボシで繭をつくりはじめる。マボシ籠はなるべく高いところにおくものとされ、中二階の方が温度や風通しがよいので、かつては養蚕農家には中二階を設けてあった。

上族のときには具合が悪い蚕がかならずいるのでさがしてとり除かなければならない。ナガレツコというのは繭をつくらないうで黒く腐ってきた水がでてくるもので、ほかの繭も汚してしまうので早めにとり除かなければならない。クビフリはしきりに首を振る病気の蚕である。オシャリというのは育てている間にも出る病気で、ちいさくしぼんでミイラ化してしまう。

繭かきから 上族後一定の期間がたつとマボシに繭をつくるので、マボシから繭をむしりとる作業にはいる。これを繭かきな出荷まで ということ。繭は手で一つ一つむしりとらなければならぬので手間がかかる。かいた繭はケバとり器で繭のけばをとる。また出荷できる上繭とくず繭など繭の選別するが、オヤマイといって二匹の蚕が一つの繭をつくったものがあり、こう



【写真52】マボシを編む編機（提供 関根寅之助）

した規格外の繭は自宅で使う。選別を終えたものは少量のときは籠にいがたが、出荷繭の量が多いときには天然木綿でつくった繭袋にいれて集荷場に運んだ。木綿の袋は集荷場に備えつけてあった。集荷場は以前は根宿の養蚕指導所にあったが、その後農協の講堂を集荷場になった。集荷場には「先生」がきていて二メートルくらいある大きなスノコの台に繭をあげ、繭を検査しながら量目を計った。

真綿つくり

出荷しなかつた繭は家で煮て真綿をとった。灰汁水がはいった鍋で繭を煮てから水洗いし、糸のひき口をみつめて引つ張りながら四角い枠にかける。これを乾燥させると真綿になる。真綿は綿入れに使うなど家庭での利用価値が大きかった。

桑畑の手いれ

桑畑には雪の降る前に秋肥をほどこす。雪解けの後早い人は三月下旬ころから桑の木を剪定しながら肥やしを施す。春蚕の分の畑を残し、夏蚕以降に使う畑の桑の木を剪定する。剪定した桑の木は春になると勢いよく伸びるので夏蚕のころには十分に成長している。桑の品種は以前は大葉の「いちのせ」をつくっていたが、後に「改良ねずみがえし」をつくるようになった。

(二) 葉煙草の栽培

①矢吹町の葉煙草栽培

阿武隈高地とその周辺は葉煙草の栽培が古くから盛んであったが、矢吹町の葉煙草栽培の歴史はそれほど古いものではなく、明治時代末に栽培に着手し大正時代から葉煙草栽培に本格的にとり組みは始めている。



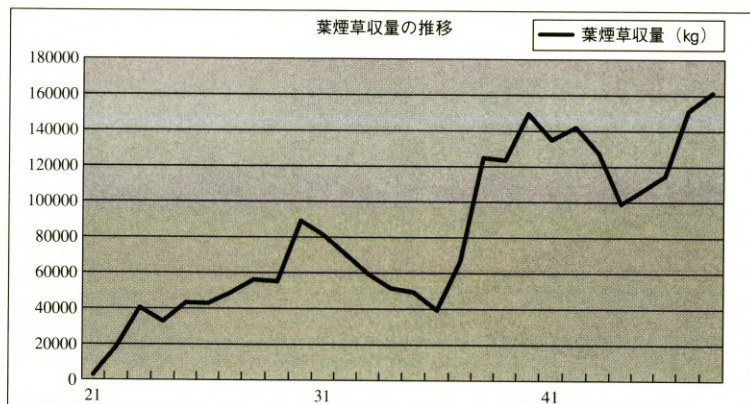
【写真53】 蚕（右上）、絹糸（左上）、真綿（下）
（提供 小磯輝子）

三神村では葉煙草栽培は明治四十五年（一九一二）に専売局から松川葉の種の配布を受けた藤井安蔵が葉煙草の栽培をはじめたといひ、大正二年（一九一三）には三神村煙草耕作組合を設立している。葉煙草は賠償金が大いので栽培者が増え昭和七年（一九三二）の組合員は八〇人であったといふ（三神尋常高等小学校『郷土誌』）。明治三十一年（一八九八）に煙草専売法が施行されて煙草は専売化され、明治三十七年（一九〇四）には収納、製造、販売の一貫化を目指した煙草専売法が施行されている。国策にのつた煙草耕作は国の保護もあつて有利な商品作物であつた。

『矢吹町史』通史編の「大正期の矢吹」の表五〇「矢吹町の葉煙草生産高」には大正元年から十五年までの当時の矢吹、中畑、三神村をあわせた統計表が掲載されており、年ごとの増減はあるものの、多い年では二一人もの耕作者（大正四年）があり、七八五四円もの収益を得た年（大正十年）もあつた。三神尋常高等小学校『郷土誌』からは既述したように、明治末の葉煙草栽培開始の経緯と昭和六、七年現在大蔵省専売局の指導下で「聯合（連）乾」していること、三神村煙草耕作組合員が八〇人おり、昭和六年（一九三一）には七町一反、翌七年（一九

【表8】葉煙草収量の推移

年(昭和)	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	
葉煙草収量(kg)	3251	18663	40280	32951	43741	43422	48649	56083	55800	88357	81582	71105	59573	
34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
51800	49541	39227	66911	124726	123968	149275	134396	142282	127559	93726	106339	114325	151548	161842



(三) には六町六反で葉煙草を耕作していたことがわかる。同時に三神村昭和五年(一九三〇)の統計ものっており、この年は耕作者七三人が五町三反余の畑で栽培し、二〇九六貫余の松川葉を収穫し六二六九円余りの収入を得ていた。中畑村の『郷土誌』からも昭和七年(一九三二)と八年にそれぞれ八九六円、昭和十五年(一九四〇)には二三七円、十六年には一四四〇円の収益があがっていることが知られる。また昭和十三年(一九三八)の「中畑村会議録」の「昭和十二年中畑村勸業報告」に「五、葉煙草耕作状況 本年葉煙草耕作反別一丁五反歩耕作人員十四名ニシテ其成績良好ナリ」とあつて葉煙草の栽培が順調に推移していることを示している(『矢吹町史3資料編Ⅱ』)。

戦後昭和二十一年(一九四六)以降の統計によれば(『矢吹町史4資料編Ⅲ』)二十一年は耕作者が四七人であるが、二十二年に一五四人、昭和二十三年三二七人、昭和二十四年(一九四九)から昭和四十二年(一九六七)まで耕作者数は二〇〇人台で推移しており、現金収入の重要な柱になっていたことを示している。しかしその後葉煙草耕作はしだいに減少に向かう。

②葉煙草づくりのプロセス

ここでは昭和三十八年(一九六三)から葉煙草栽培をはじめ、平成十六年(二〇〇四)現在も継続している中畑地区根宿のSさんからの聞き書きをもとに、葉煙草栽培の一年を追ってみることにしたい。Sさんは煙草の指導員をしていた寺内の義弟にすすめられて葉煙草栽培にはいった。煙草栽培も早くから省力化がされ現在は作業の機械化により大幅な省力化により、かつてユイでおこなっていた集約的な作業も家族員の一、二人でこなすことができるようになってきている。またすべてを手作業でまかっていたころの状況は再現できなくなってしまった。

煙草耕作者 煙草耕作者は地区ごとに組織化されていて、たばこ会社と耕作者は地区の総代区をとおして情報のやりとりをする**の総代区**。たとえば旧中畑村には中畑総代区が設けられており中畑地区の葉煙草の農家はこの総代区のメンバーになっている。総代区の責任者を「総代」という。以前はかなり多くの構成員を持っていたが現在は一三軒しかない。内訳は根宿が五

軒、松倉四軒、鍋内二軒、寺内二軒である。寺内は中畑地区でも煙草耕作が盛んなムラであつたが激減してしまつた。

種の分配

会社から契約栽培している面積の分だけ総代区の区長のところに種を送つてくるので、みんな集まつて総代宅で種をわけける。新聞紙などをしき腕に種をいれておき、一〇円玉に種をのせて計り必要な分を封筒などにいれて持ち帰る。

根宿のSさんの場合かつては七反栽培していたが、現在六反歩でバーレー種を栽培しており、主に息子の嫁が煙草づくりを担当している。かつては旧中畑村の中畑総代区は葉煙草栽培が盛んで、特に寺内では葉煙草づくり農家が多かつた。

苗床（仮植床）

苗床（仮植床）は高さ四〇センチメートル程度、広さは植える畑の面積に応じて違ふ。三坪ほどか。苗床は矩形にして

三尺おきに杭を打ち枠をつくる。杭の間に穂の部分を上にした小束の藁束を立てて並べ、藁束が倒れないように内側と外側に上下に二本くらい竹棒を渡して挟み、ところどころしぼる。かつては藁を編んだという。現在はパイプを使って藁を挟んでいる。立てた藁の上にはみ出た部分をきりとりつてきれいにそろえる。この中に秋にさらつた木の葉を踏みこむが、木の葉は一坪にビク四つ分が目安になる。押し切りで四等分くらいに切つておいた藁を木の葉にまぜる。藁は一坪あたり大束二つくらいを目安に使う。混ぜた木の葉と藁に水をかけて湿らせながら踏みこむ。三〇センチメートルくらいの高さに踏みこんだ上にコヌカと鶏糞、肥料などをまぜあわせたものを振りかけ、その上に山土を一寸五分から二寸程度の厚さにいれ、^ビ肥土とよばれる腐葉土をしき詰めておく。この肥土は前の年につくつた苗床の腐葉土である。さらに弓竹をはつてビニールを被せて保温しておく。

ポットの準備

と種まき

現在はプラスチック製のポットとよぶ親床の苗箱で発芽させる。Sさんが葉煙草栽培をはじめた昭和三十八年（一九六三）にはすでに栽培用の苗床は使われなくなつており、今とは形が違つてはいたがやはり苗箱での栽培であつた。苗床は活着が悪いし苗を運ぶ間に土が落ちてしまう欠点があつた。ポットに細かく篩つた肥土をいれて種をまく準備をする。

煙草の種と 種まき 種まきは三月十日ころを標準にするので、それ以前に仮植床などの準備はすませておく。煙草の種子は指定されたものが会社（J T）から送られてくるのでそれを使う。煙草の種子は褐色をした細かなもので一反歩の畑に栽培する種子は一〇円玉にのる量である。かつては土と混ぜてまいたが、今はジョウロに水と種子をいれてから攪拌しジョウロを使ってまく。ジョウロは市販のジョウロの孔を少し大きくして使う。以前は細か篩った土に種を混ぜて手でまいたが、ジョウロでまくようには均一にはまけなかった。苗箱はビニルハウスにおきヒーターにのせて保温して発芽させる。

間引きと仮植 苗箱にまいた種は一週間ほどで発芽する。発芽後七、八日経ち彼岸過ぎの二十五、六日ころ間引きをする。間引きは密になって発芽しているところもあるので、重ならないようにピンセットでつまんでひき抜く。そのころになると一日でぐんぐん伸びる。四月二日ころに仮植する。

三月につくった仮植床のポットに仮植するが、仮植というのは仮植床の上に並べたポットに植えかえることをいう。そのころになると仮植床は腐葉土などの作用で熱を持ち土の温度は二〇度くらいまであがっている。煙草は一六度以上にならないと根がはらないという。四枚くらいの葉になっているのでポットの土に一本一本植えていく。ポットの仕切りの数は二五枠のものをを使うように奨めているが、数が少ないポットは枚数を必要とし面積も広くなり土も余分になるので三六ポットを使っている家も多い。Sさんがはじめた昭和三十年台の末期ころにはプラスチックではなく松の板を薄く削った板で仕切った組み立てのポットを使っていた。

仮植後ビニルシートを被せて温度調節をするが、昼間温度があがるようなどときにはビニルを外し、夜間寒くなるようなど



【写真54】葉煙草の種子
十円玉にのる量が、一反歩の葉煙草の分

きはシートの上に保温のマットをかけたりする。

畑に植える 四月二十五日くらいになると仮植床から畑に植えかえる。そのころには葉が七、八枚に成長している。

煙草畑への移植

煙草畑は病気がはいらないように土壤消毒をする。初期のころには耕耘機でうなつたが現在はトラクターで三、四回うなつておき四月にはいつてウネをたてる。ウネの間隔は一メートル二〇センチ、株間は三二センチにして、ウネの中央には土とまぜたこやしを施して土を寄せ、ビニールをかけておく。こやしは畑に使うようなものではなく会社から支給されたものを使わなければならない。今は動力の移植機を使って植えるが、以前はサクボウと称する定規で測りながら移植器に苗をいれて一本ずつ手で植えていた。機械植えでも二、三日かかるので、Sさん宅では手植えのころには四軒でユイをして移植の作業にあたっていたので、ユイでおこなえば一日で六反歩くらい植えてしまうことができた。現在ユイはしていない。

移植した後の穴をうめるために土寄せをした。以前ははじめに八割の肥料をいれて、一〇日くらいしてから残る二割をフタゴエ（追肥）として施したこともあったが近年は一度肥料をいれてしまえば追肥はしない。現在はないが、以前は「一畝一万円になる」といってフタゴエをしてから丁寧に土寄せをした。土寄せをすると上根（うわね）がはるので目方がとれるようになるのだという。土寄せに使う鋤は煙草畑専用のもので、三三センチ幅一〇センチ深さくらいの小ぶりの鋤で軽くて使いやすい。今日では移植してしまえば成長を待つだけになった。

煙草の葉の呼称 六月二十日ころ「どはとり」と称して、一番下に生えた二枚の葉をとる。煙草の葉は下から「どは（土葉）」と煙草と「ちゅうは（中葉）」、「あいは（合葉）」、「ほんば（本葉）」、「うわは（上葉）」、「てんば（天葉）」と決まってい



【写真55】 煙草畑で使うこぶりの鋤

いるが、近年は上葉と天葉をいっしょにして「うわは」とよぶ。

土葉をとってから一週間から一〇日過ぎて中葉をとる。七月にはいり中葉をとるころになると、蕾つぼみを持った花が咲きはじめるので、「輪ほど花が咲きはじめたところ」で「芯止め」と称して天葉の上で芯を止める。中葉をとってから一週間ほどで合葉をとり、さらに一週間て本葉の収穫になる。葉煙草は合葉と本葉が最も品質がよく量もとれ、高値で売れるのも合葉、本葉である。本葉をとってから一週間くらいすると、その上の上葉・天葉の部分七、八枚は一緒に幹から切る。これを幹刈りといい、幹刈りしたものはそのまま乾燥させる。

以前煙草の葉をとるときに白いウワツバリのような衣服がはやったことがあるが、このあたりでは定着せず普通の作業着で作業をしている。葉が折れないように収納できる鉤かぎのついた専用の布袋があつて、とった葉はこの袋にいれ運搬機で畑から運ぶ。煙草とりに以前からこの袋をつかつており煙草の葉を摘むのに籠を使つた経験はなかった。

乾燥から納付まで

煙草繩と称する煙草の葉を吊るす繩がある。以前は煙草繩もじりといつてユイで藁をなつてつくつたが、近年は麻製の煙草繩がある。長さは二、三尋くらいである。煙草繩に葉の軸を挟みこんで、一繩八〇枚くらいの葉を吊るすことができる。Sさんの家では煙草の乾燥小屋があり、そのそばにビニルハウスをつくつてあるのでハウスの枠に煙草繩をはつて乾燥させる。天候しだいであるが二週間程度そこに吊るしておくようである。乾燥の度合いは葉の色と茎の色をみて判断する。はじめは葉は青い（緑）色をしているがそのうち黄色になり、さらに褐色にかわっていく。葉の色が褐色にかわつたところで涼しい乾燥小屋に移して吊るし直して直射日光にあてないで茎を乾かす。乾燥機を持つている煙草農家では葉が褐色になつた段階で乾燥機にいれて乾かしてしまふ。Sさんがはじめる前は地干をしていたらしい。芝生になつていよう



【写真56】葉煙草畑

な庭に昼間広げ、夕方になるととりこんだという。

煙草縄を外す作業は九月にはいつておこない秋の彼岸あがりくらいまでかかる。機械での稲刈り以前は稲刈りの作業と重なっていたので、昼間は稲刈りをして夜に煙草縄を外す作業をした。昭和三十年代末には煙草の葉を伸す、いわゆる「煙草のし」はせずにコモにくるんで納付するようになっていた。現在はより簡便になっていて、まず煙草縄の長さにコモをしき、葉を縄に吊るしたまま縄をコモへりに沿っておき、葉は内側に向けて広げる。コモの左右に対称に煙草葉を広げておく。縄を左右それぞれ一五連ほど重ねてからコモを端からまるめていくと、縄に吊るされた煙草の葉はコモの間にまるめこまれることになる。コモをくるみ終えると円筒形になるので葉が動かないように葉が重なっている部分のコモを二か所しぼり、この後端に出た縄の目をゆるめて縄から葉を動かさないようにして外すと、煙草葉はコモにくるまれた状態になる。

コモにくるんだ状態で作業所に運びこみ「選別」の段階にはいる。まず「調理」をするがこれは「葉わけ」ともいって専用の蛍光灯の下で一枚ずつ色や形をみることで、むれ葉とか病気葉など基準外の葉を除外し分別する。分別は着葉位置ごとにおこなう。かつてはもっと細かくわけていたが現在は三段階くらいに分別している。調理した葉はある程度数になると紙ひもでまるめておく。それを電動圧搾機にかけて圧搾し梱包する。以前は選別の作業をおこなうには二、三人の人手が必要であったが、現在は一、二人でできるようになっている。



【写真57】煙草の葉をくるむコモ



【写真58】旧矢吹煙草収納所（現在の中央公民館の場所）

以前梱包を終えた葉はたばこ会社からトラックでとりにきたが、三、四年前に会社に持つていくようになった。しかし平成十七年（二〇〇五）からは再び会社からとりにくる予定になっている。Sさん宅では一月の中旬に須賀川のたばこ会社に持つていった。会社では十一月下旬から二月中旬くらいまで納付の受付をおこなっており、会社に持ちこむと量目を計り等級をみてくれる。もとは矢吹地区は耕作者が多いので十二月から三月までかかって納付したというが、最近は耕作者が減ったので納付の期間も短くなった。

Sさんが煙草栽培をはじめた当初は現在の矢吹町中央公民館のところに煙草の集納所があり、四等級にわけ四等の煙草は全部外国に輸出していた。当時は中畑には耕作者が多かったので、中畑だけで収納に一週間もかかっていたという。大信や中島など煙草栽培が盛んな土地には収納所があった。

煙草の種とり

根宿のSさんは三年から四年間くらい白ダルマ種の「煙草の種とり」をしたことがある。これは会社から何十本とるようにと指定される。煙草の種とりはだれでもできるわけではなく、品質のよい葉煙草を納付し、畑の状態のよいような人から選ばれる。指定になると素性のよい煙草に竹を立てて、病気がはいらないように袋をかけたりに種とり用に育成し、会社の方からもみにくるといふ。こうした種とり用の煙草は葉をあまりとらずに育て、花が咲くとよい花だけ一〇個から一五個くらいを残してほかの花を摘みとってしまう。煙草は丸い実をつける。実がはいってから八月下旬に実のついた先だけをカッタギリ（切りとり）、それを陰干しして、九月の中ごろにゴザの上で実を揉んで種をとる。落ちた種には皮も混じっているので扇風機のようなもので皮を飛ばして、きぬ篩でふるって種だけを落として選別する。中にいれると皮などの塵を飛ばす専用の機械もあった。こうして収穫した種は手ぬぐいを縫ってつくった袋にいれて、袋に品種や名前を書き入れて十月中旬に会社に納めると会社からお金をもらうことができた。